

川柳塔

昭和四十一年一月一日 第三種郵便物認可
 昭和四十七年三月二十五日 印刷
 昭和四十七年四月一日発行 (毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通卷五三九号



No. 539

四月号



清酒
日本盛

灘西宮酒造 釀

ニホンサカリ

超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリツトル詰・一、四一〇円



超特撰 日本盛
みがきぬかれた 灘の酒



えらばれ

国立公園 浦和歌新奥

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る
海岸美を
風光明媚な

雛祭孫に似て来た雛の顔

軽井沢まで来て断絶の念を押し

俺に妥協はないぞライフル銃狂い

子の母と母の子惨めさだけ残す

装甲車にかくれ甘っちょろい母が負け

中島生々庵



優秀作

先日或る知名人の講演を聴いた。その中の引例に興味深い話があった。アメリカでの話。或る一農夫が優秀なトウモロコシを栽培して、年々州知事から表彰されて居た。ところがその農夫は自分の優秀作物の種を附近一帯の農家へ広く贈呈するのである。これを怪訝に思つて、何故そのような秘法と努力で作り上げた優秀な種を、周囲のいわばライバルに頒けてやるのかと尋ねた人があった。その答えはこうであつた。優秀な作物を得るためには自分自身の努力もさる事ながら自分の耕

地の周囲に不良な作物があつてはならぬ。周囲に出来た不良の花粉が、自分の作物に媒介される恐れが多分にある事を忘れてはならぬ。従つて自分の作物の優秀さを努力するには先ずもつて周囲の作物が優秀である事が肝要であるからである。と。

その言やよし矣。現在いろいろな意味で悩みを持つてゐる私達にとって、句会の意義、柳社のあり方等々極めて示唆に富む話である。噛みしめて見たいと思う。

座右の句

泣いてるは他所の子針を持ち直し

(湖月)

私の句

投げ売りを値切ればあんた去になはれ

福島鉄児

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

優秀作

ユーモア味

川柳初篇研究

……(百五)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

若本多久志

(20)

中島生々庵

(2)

中国肉票探偵談

「旅人」以後の麻生路郎作品

……(16)

東野大八

(22)

川柳塔(同人作品)

近作柳樽

菊沢小松園選

(4)

「土左日記」の川柳味

石崎柳石

(30)

一分間の柳論

河村日満

(24)

秀句鑑賞

……(同人吟)

橘高薫風

(41)

近詠

……(近作柳樽)

若本多久志

(28)

諸家

(19)

ユーモア味

若本多久志

しがみつくほどのこの世でなかりけり

これは亡き路郎先生、晩年の句であるが、こうした心境は平素言われていた「川柳によって陶冶された人間性」……から生れる尊い境地だと考えられる。

そして、善悪美醜の錯綜したこの我々人間の周辺に、日々起る凡ゆる現象を、微笑しながらジッと見つめてゆける川柳人こそ、世にも幸福な人間であり、ユーモアも解する文人だと言っても過言ではない。

こうした諸先輩の作品はもとより、その生活態度に於ても実に羨ましいばかりの心境で、時には軽い諧謔をとばして周囲の雰囲気をやわらげ、何の作為もない赤裸々な人間味を表現されるのである。

路郎先生の衣鉢を継ぐ人とまで言われていた故豆秋氏の句に

口髻を生やして猫の子が生れ
けなげにも家主の犬を噛んで来た

川柳五十三次…(十九)

富士野鞍馬

(44)

葭乃先生の某月某日

高鷲亜鈍

(27)

花嫁の

弥生・村颯子・勝晴・史好

(39)

雑筆春秋

水車・与呂志・要次・頂留子

(59)

雅号ぶっちゃげばなし

藤井明朗

(53)

ソクラテス

光武弦太郎

(29)

川柳東海道(上)

不二田一三夫

(46)

春は大萬川柳大会から

本田恵二朗

(52)

初歩教室

川村好郎選

(50)

大萬川柳「二の足」

(薫風)

(54)

柳界展望

(庸佑)

(60)

各地柳壇

(文秋)

(48)

一路集

河井庸佑選

(49)

「新」人

西尾青一路選

(65)

「金」

石倉旅風選

(48)

「絵」

(二三夫・葉子)

(48)

座石の句

(伍健)

(48)

考えを直さばふっと出る笑い

(伍健)

(48)

私の句

(伍健)

(48)

すて石になってうれしく雨も受け

(伍健)

(48)

越智一水

(伍健)

(48)

越智一水

(伍健)

(48)

越智一水

(伍健)

(48)

守り札もるともチボに取られたり

鼻かけたまま国宝に指定され

速いかにや消えてしもうと火事見舞

豆秋氏にはまだまだ名句があるが、たった

これだけの句の中にも柳壇の一茶、とさえ賞

讃された人間豆秋のユーモア味を偲ばせるも

のがあり、彼の立派な臨終の態度を知る者は

更にそれを感じるであろう。

又、悲劇の詩人、香林氏の句に

除夜の鐘借金とりも寝たかしら

重役になり人間になりぞこね

というのがあるが、前句は大晦日の晩、除

夜の鐘が鳴るまでがめつく貸金を取り立てて

歩く鬼のような人間と、これにおののく弱い

庶民の心理を浮き彫りにしており、後句はた

とえようもない鋭い諷刺で世の重役に迫って

いる。私は時折り彼の最後を追憶して、詩人

薄命の感を深くして涙が浮ぶ。

最後に現存柳人の句の中から二、三、ユー

モアのある句を味わって筆をおこう。

特急に蠅が乗ってた乗っていた

キッスした口を歯医者へアーンとあけ

故郷の父候文で叱ってき

鼻声で仕止めたミンク風を切る

ホステスというのは鼻が上を向き

多美静愛

久馬鳩



西尾 榮選

横井さん帰る

大阪市 正本水客

ひとりの兵士がインタビュをとまどわせ
竹ヤブの斜面に無心でパゴの服を縫う

当用漢字を敵の謀略とも信じ

十五階のガラス日本の未熟児が育つ

東京の空がグアムより貧しい日

岸和田市 高橋操子

札幌の雪心地よく降る画面

着る人が着ればミンクにある気品

モーターのネオンと知った山の奥

商売と別に仕入れた好きな柄

お多福の面をはずせば古稀の人

神戸市 小浜牧人

達観の域を古参の平社員

仲人の太鼓判ほど出世せず

独り言お国訛りを憚らず

長髪の不協和音を聞くに似る

コースで送る別れの美しや

倉敷市 水粉千翁

還 暦

むらさきの蒲団口惜しいけれど着る

追憶へおんな週刊誌を伏せる

吸殻の山で妥協を探し合い

照準が合わないけれど平和論

はくろから遥かな人を呼びもどし

豊中市 戸田古方

曲線という条件で解けてくる

念力のこもったはず蜘蛛の糸
スリリングさも真実を偽装する
わるい癖またおじいちゃんつけはった
因果という公式の厳しすぎ

八尾市 香川 酔々

邯鄲の夢ほどでない夢が醒め

仁義めく今浦島の語り口

ジャングルの中から帰る菊の紋

悲しさは二階から見る水溜り

ガス管の端をばっさり切る人事

宝塚市 傍島 静馬

散髪しただけで老父の今日終る

爪切りがデスク一巡して戻り

釣天狗いでたちほどの腕でなし

鍵れ解いたら隣の針にかかった

不審だらけの祖母の童話で寐てしまい

島根県 堀江 正朗

せっかちに自己反省の日の佗し

年毎に鈍りし勤に迷う手よ

手に触れる僅かのなかに師が居ます

盲人の正座は意地の固まりか

分ってるような顔してつま楊枝

大阪市 中川 滋雀

アルバムを閉じ春灯にたぐる過去
足音へ愁眉をひらく娘が帰り
ロマンズがこれでもあつた孫を負い

横井さん帰還(二句)

軍曹の生きた化石のまま還り

タイムトンネル祖国の空は汚れとり

富田林市 岩田 美代

無意識にさわりを込める語に魅かれ

一言も触れない妻を重くみる

夕やける雲に帯の彩を選び

目の覚めぬ蓑虫つけて芽吹く枝

思い切り怠けなさいと雨の絹

岡山県 浜田 久米雄

マンションで寄付とはっきり断られ

ありあまるレジャーに金がついて来ず

寝たきりを訪えば片手で拝まれる

通帳の額をこころに言い聞かせ

若者の方から歩巾合わせられ

倉敷市 本田 恵二朗

素人目には完成したように見え

倅せな梅重文の庭で咲き

腹芸に吞まれて妥協してしまい

和服着る稽古二時間着ておれず

黄道吉日白足袋はくも久し振り

大阪市 本多柳志

猫の足拭いてこのひと子を産まず

松の間へ女将は足袋をはき替える

人間のエゴ高らかに豆を撒き

読めるなら読んで見るさと書道展

石橋を叩いて惜しい株価欄

香川県 岡田拳法

御近所も被害仲間で落着ける

足元に火がつくまではよそのこと

事故続きお不動さんを受けてくる

守らない規約激論して作り

主流派になればまともなことも言う

兵庫県 遠山可住

技術屋で通せる頑古さも旧家

連休は田舎に五反の畑が待ち

結論を結んでゆけば円になり

猪の徑にこぼれた寒椿

はばたいで見よう青空ある限り

尼崎市 高津徹也

大局観は俺がにぎっている自信

結論の出る頃そっと席を立ち

ノスタルジアと片付けられた淋しさよ

地球儀がくるくるまわっているニュース

烙印を押されてからの楽しさよ

香川県 三井酔夢

愛執が断てないのです除夜の鐘

さりげない賀状に古い恋一つ

幻想のレールが光る走らねば

かざぐるま無色少女は実母恋う

灰色の海がひろがる夫と居て

堺市 河内天笑

もて過ぎた夜はブスツとして帰る

すっぱんの生れかわりよ恋女房

焦燥をのせたブランコ揺れ止まず

二三回サヨナラ云うてまだ喋り

遊仙さんに句集を借りて

豆秋のふるさとうつす写経に似

大阪市 橘高薫風

黒い炎は人妻の掌の黒茶碗

吊皮は手枷 生涯平社員

受験子のすでに闘う白い息

正夢と男云う女否と云う

ギター抱きばろんぼろんとこぼす悍

大阪市 不二田一三夫

連合赤軍「あさま山荘」牟田泰子さんを人質(27・2、19・28)

二十八年より長かつたるに十日間

「僕」と云う土工 中央公論読む

矢印がほしいバスの女子選手

寄席(二句)

トチったをアホから叱言の楽屋裏

すいばれ(雨天)のドサ宿わびし五六人

鳥取市 河村日満

三カ日村裏に伏す

喪に伏しいても正月飲みは飲み

死ぬものは死にゆくなどというとれず

大井正夫氏を迎えて(二句)

久潤のガタと落ちてゐる酒の量

せせらぎに醒めて三朝の陽に出合い

高槻市 若柳潮花

初春の髪は日本の鬘に結い

名ひろめに貰うたひいきの鏡かけ

燃えつきる淋みしさ灰のなかの恋

ありったけの子供を連れて来る年始

尼崎市 黒川紫香

嫁さんをもえと六十やもめなり

不甲斐ない男になって席を立ち

ぬかるみを飛び越え飛び越えついて来る

盛装を右往左往して写し

出雲市 尼 緑之助

酒仙には遠しもろくも崩れ去る

太鼓のんびり暖冬の寒修業

焦ってる証拠のように飲む薬

バラバラのムード寝所のウイスキー

松江市 吉岡通児

二十八年ぶりに帰国された横井さん(二句)

戦陣訓と共にグアムの風に耐え

十円貨チャリンと四囲をふり向かせ

はや二月時のかけらの散る音と

みの虫の撫然と冬の風に揺れ

岡山県 直原七面山

恋待つ女の肌は火の色

春に背いて冷えて行く恋

百円化粧で男を釣る気

焦れ死する程の恋してみたし

大阪市 山川阿茶

後悔へ心のみだれ字のみだれ

無抵抗主義と三猿主義でゆく

狎抱いてお稲荷さんへ参詣し

またしても心に隙間栓をする

青森市 工藤甲吉

税務署だって馬鹿正直をわらって

押してくる人へ背中でモノを言い
孫と凧あげて働き口が無し
国会中継長々と孫ふくれ

門真市 福島鉄児

茶柱へ素直に妻の言葉聞く
靴すべり今日も重たい靴をはく
履物が乱れているも妻の留守
ドラマ佳境電話のベルを譲り合い

京都府 大鶴喜由

一日一日春は土手からふもとから
ジャングルに一万余日堪えに堪え
スキーヤー百分の何秒の差に生きる
燃え残る火はネクタイを赤に換え

神戸市 仲どんたく

ハローハロー地球の裏からTELEが来る
孫連れて帰える女房だから待ち
消えて行く明治をカメラで追いまわし
ベレー帽顧問と云う名になってから

大阪市 西出一栄

立春に一枚重ね着する寒さ
へそくりの趣味も一つ減り老静か
着道楽疎遠となった気の軽るさ
連休へ恵みの雪のタイミン

八尾市 高杉鬼遊

カラフルな風に思想が流される
詩のない電気で剃った髭をなげ
列乱す男に面を見てもらい
生きる世の風の谷間で爪を切る

藤井寺市 西 いわを

顎紐を緩めて話合える仲
辻地蔵目当てに訪ねて来いと云う
奈良盆地どの山もみな美しく
白魚のあわ 泡として哀れにも

堺市 吉田圭井堂

捨てる気で捨てたのではない捨て子
はしご車の届く範囲で部屋をとる
階段につきまとわれる都会人
衰えを気力で庇う古稀の春

和歌山市 垂井葵水

ゆっくりと喋べるつもり洗い髪
ナツメロはするする口がついて出る
聞き上手マツチの用意させたまま
水仙の花撰る指が太すぎる

岡山市 川端柳子

素通りにすがらんものといのこづち
焚火の輪 煙に消えたわだかまり

良い方の声で馴染みの電話口

生き残りの横井さん

今浦島あなたの意志でなかりしに

大阪市 吉岡美房

古くとも国旗はわしが出すと決め

片想い春の足音盗まれる

先輩初孫を得る

初孫の帰る日デイトするみたい

初孫の電話を妻にじらされる

倉敷市 小野克枝

生涯の味方ひとつの灯を信じ

妻の価値ボツンと白い冷蔵庫

夕焼けがきれいやがては旅立つ子

正直な鏡 女が揺れている

島根県 小砂白汀

カンバスがまともに染まりゆく安堵

確率を信じあしたへ投網打つ

棘厚くまとい薊よなぜ炎える

たわむれにさえ泣ける女の魔性

米子市 林瑞枝

子を離し姐上思案の手が止まり

ざるに似る生活に零さえ貯めず

レモンの輪過去を奇麗にして語る

初老もうせめて鼻緒を赤く履き

米子市 八木千代

地藏札野にも出でとや歩めとや

泣きすぎる女が通夜に来て白け

踏み入れて部外者だったのが判り

鶴を折る子の沈黙がいとしくて

岡山県 池田古心

愚痴ばかりこぼして過疎で老い残り

カーで来たばかりの花見淋しけれ

何時死んでもいいのがあさる長寿法

横井庄一氏復婦

幽霊に足あり戸籍変えさせる

笠岡市 木山要次

駅員が売店にすこし借りが出来

すみません云える妻にて他人めき

お天気を褒めて話題をはずしたり

成人式

忠孝を知らない僕で人と成る

大阪市 神谷凡九郎

人間の哀れ自分が離れない

これが世間サ私も泳ぐ

悟り切った言葉を口にするのははずみ

これもあれも虚勢自分失なうて

大阪市 河井庸佑

なるようにしかないと今わかり
どうしても妥協できずにいる孤独
老いて子にいつも従うてなどおれず
双方の言い分聞いてまとまらず

兵庫県 大江秋月

うどん屋から犬が駅まで従いて来た
英賀保駅長に転任

播磨路の駅へ赴任の荷をまとめ
妻ひとり残し駅長赴任する

横井伍長帰国

今様浦島特別機で帰国

桜井市 岩本雀踊子

人間の弱味が背伸びする赤字
遠い日のリズムにふれる戎橋
さりげなく聞く役母が買って出る
人妻にふれる心の日誌とず

京都市 都倉求芽

ふんばったがために踏台として終り
人形の微笑み焦点がきまらない
北風へみな生きてゆく歩幅

商談の前にまずは明日のレースから

倉敷市 小幡里風

開運の鍵は愚妻が持っている
裏切りの電話きれいな嘘をきく
ラブソング今少年の殻を脱ぎ
盆栽の松が何かを訴える

鳥取県 清水一保

注意して呉れた教師も交通禍
正月が去って氏神遠くなり
大海へ注いで泉も塩に和し
運命はビニール育ちの花で朽ち

奈良県 石倉旅風

黒いのを一本抜いたヘアブラシ
元日や密柑の皮の筋をとる
太鼓判押されて重い荷を背負い
咲くだけは咲かせておいて散らす雨

大阪市 小出智子

朝のラッシュへ通院の身を縮め
抱きしめてやれば素直な子の瞳
私を埋めるほど雪降ればよい
人の持つダイヤを愚かと思うまい

八尾市 飯田悦郎

歳月がこんな姿にしてみたい
赤いバラ二人歩いた早春譜
のれん分けしてものれんの味継がず

マイペースそれで心が焦ってる

今治市 小笠原青女

合格へ階段一つ踏みはずし

底辺に生き人世の峠こえ

或日ふと気付けば妻の白髪ふえ

栄光の後で孤独をじっと噛み

堺市 高橋千万子

マイペースこのままでよいねじを巻く

春の声老人会も動き出す

心とは別な言葉にすらすらと

使い捨て時代へときや念を入れ

倉敷市 谷井扇水

情実がからんで藕のない笑い

負けてやる日の口実を考える

愛情のある武骨さにもてなされ

示談書へ逆さに判をつく若さ

高槻市 福田丁路

知らん顔も出来ずお祝い持って行き

巻紙で明治気質の強意見

偽医者達の腕を惜しまれる

出雲市 弘津柳慶

虹消えてあとはむなしい曇り空

ドンヨリとした日が続く過疎の村

暖冬へ風邪以外にも強固なり

松江市 中川晃男

湖と青い空ある町に生き

喋る母の愛に無口な父の愛

同情の言葉までうたぐる敗者さびし

島根県 藤井明朗

金の要る相談今更抜けられず

苦劳買います唄だから言える

同窓会妻いそいそと髪を染め

竹原市 山内静水

呼びとめてベット糸くずとってくれ

日曜を風邪が仲良く寝せてくれ

たまに着る背広にちゃんと数珠があり

松江市 小林孤呂二

たった判ひとつ微に入り細に入り

去るものは追わず梯子酒ひとり

アイシヤドウ若さを誇るものでなし

姫路市 隠岐不醉

あこがれを抱いて設計する間取り

説けば説く程逆に来る昭和の子

娘まかせと親は乗気であるくせに

愛媛県 渡辺曉童

白足袋をはくと女の足が生き

金だけですまぬ世だから又もつれ
赤き椿の 赤きまま落ち

大阪市 金井文秋

おじいちゃんが云えて電話に出てくれる

どっこいしよと肥満が云わす昇り降り

内職の儲けあんまに削られる

大阪市 木村水洞

限界を悟ってからはよく眠れ

肩書がとれて本当の酔い心地

なるようになって長屋今日も暮れ

笠岡市 木山遠二

団参や信心の顔遊ぶ顔

親切へすぐに涙となるも齢

身辺多難

水底へ届けば蹴って浮くつもり

名古屋 吉田水車

横井さん奇跡の生還(二句)

蚊柱の声戦友の声としも

いささかのひまをむさぼる古参株

仕上げには親方の手で一と鉢

岡山県 大森娛句楽

竹の園護り半生 生き続け

大倉で自信過剰の夢が消え

古器古陶蔵に埋もれて邪魔がられ

宇部市 石川侃流洞

一升壺注ぎ分け斗志誓い合い

我を張って一人淋しく本を読み

目撃の怖さ身ぶるいまだ続き

大阪市 福井野迷路

うまそうな寿司を食わさぬ話好き

よごれてる空気どころか心まで

その代り忘れる功德有難し

大阪市 有信新之助

終電のホームで抑えていたあくび

赤電話ブーツの横はしゃがみこみ

参拝と見物がくぐる大鳥居

京都市 松川杜的

日章旗三本あお札幌の日本晴

横井さんに泣き繭子に泣いて妻多忙

老い込まぬ勤めと思えどさりながら

倉吉市 奥谷弘朗

役人と呼ばれ小さな梓で生き

結局は妻のペースで家が建ち

持ちまえの頑固金策には向かず

大阪市 児島与呂志

義理缺いた詫び考えてけつまずき

世話好きの佗びしさ今日もだまされる
珈琲の香りに外気を遮断する

高槻市 山田季賛

腹立てた僕を上役は笑うだけ
別居住まい長期出張の職に生き
降職の話を師走へ持ち込まれ

大阪市 川口弘生

てんや物に飽く頃妻の風邪なおり
訪れた弱味吠えられた犬もほめ
雪つぶて自分に来ないのも不満

大阪市 天正千梢

新鮮な視角へよろこびの質をこえ
ほんとうに好きな事だから続き
必然性で動きプラスマイナス考えず

伊丹市 小川静観堂

美しいお人ときめてまだよう会わず
忘却の彼方へ老春までが往ちまい
愛の合鍵持つてただけでもどかしく

倉敷市 藤井春日

人生のルール無視した日々に生き
ゆきずりの恋と知りつつ燃え続け
草花を賞め合うただけの恋

倉敷市 野田素身郎

結局は金が円滑油となりぬ
可もなく不可もなく永年勤続賞を受け
切っ掛けになるハンカチを踏みつける

宇部市 平田実男

エリートのおんな小石にけつまずき
上役へ財産のある口が過ぎ
中一の娘を叱るのに妻見上げ

岸和田市 福浦勝晴

五六人かんとんに消すボールペン
自分から明るい性質と触れまわり
アメ玉をしゃぶって孤独の白い雲

生駒市 草深醉升

京都観世会館にて(二句)

古稀祝う桧舞台に立つ若さ
おともしてうたいの会で肩が凝り
暴落の痛み忘れて買い漁り

美禰市 安平次弘道

定年になっても定時に目がさめる
暴力団サルの社会に似た組織
感情の極致涙がただあふれ

岡山県 坂井三葉

もう一つの心が妥協したがって
ハイミスの孤独洋酒の名も覚え

本名にかえれど妓に子が一人

兵庫県

河原みのる

すれ違いまだブツブツと老夫婦

ボクも亦枯木となって山に活き

それとなく寝棺の広板挽いておこ

大阪市

宮尾あいき

里心つけそで電話もあきらめる

ポンコツの夫婦になつてさしむかい

鬼になげた豆を鳩が来てひらう

大阪市

河野君子

寒波来て浮かれ出た芽にある迷い

聴診器の不信へ鼓動高まりて

嫁ぐ娘へすき間風さえ身に疼く

松江市

柳楽鶴丸

ブルーランコ貴女が空から下りて来た

クルクルクルりんごを廻して皮をむく

僕に身構えている見えない掌が

東大阪市

宮西弥生

ほんのりと妬いて愛に灯をとます

好きなひと見える角度にいて雑談

偽りの世に背をむけて百合の花

姫路市

村上春巳

父さんが死んだ空虚なカナタイプ

どの顔を土曜の顔で昼の街
スーパーへ行くだけ妻の免許証

大阪市

江城修史

再発の眼に空の青涯しない

美しき嘘聞く茶房の外は雨

かにかくに夜霧は恋を切なくし

広島県

高橋鬼焼

部屋中の笑いへまじる旅づかれ

踏まれても言いさ私のちびた靴

着かざって後姿へひまがいり

堺市

藤井一二三

何時別れるんやろかとスター千一夜

脱線用のレールも持って嫁く女優

坪千万のミナミで綿菓子売るくらし

笠岡市

出原真奇

札幌五輪(一句)

真駒内「世界は一ツ」の美へ拍手

風邪で寝て腰の痛さに耐えている

泣いてても女云いたい事は云い

東京都

増田次章

札幌オリンピック(二句)

片すみでオリンピックもやってのけ

披露宴用意の祝詞先き云われ

叱ったが子どもの方にある理くつ

竹原市

森井菁居

悪夢追放酔うているまの事でした

指切りの温みあしたを信じよう

愛憎の渦を夫婦として耐える

守口市

村田瓢太

敬老会と間違えられた同窓会

日曜の朝寝へ空からがなりたて

空・海・陸汚しばなして国は富み

松江市

舟木与根一

暖冬の老木あわれ狂い咲き

暖冬へ汗かいているニューモード

「冗談々々」男下げそであわて

鳥取県

川崎秋女

食欲のないまま春日遅々と暮れ

ほどほどのお世辞職場の和を保ち

弥次喜多をフト想い出す超特急

岡山県

出原敬一

いつの世も母から順に夜が明ける

葬場にけむり此の辺悲しい日

家業継ぐ息子の飯を先につき

松江市

恒松町紅

人間の都合は酒が責めを負い

名画に似て過疎とは見えぬ雪景色

グリーン車の棚へ祝福載せて発ち

枚方市

宮川珠笑

真似る子がいるから夫婦争わず

晩酌の肴めあての子らが酌ぎ

ほっとして宿直日誌へ異状なし

倉敷市

松下梁水

節くれた掌で人生をごま化せず

讚美歌に悔いる心の嘘一つ

出稼ぎの髭がほころぶクレヨン画

和泉市

西岡洛醉

日雇の糧ふきだまりの街に群れ

旅の味ここから変わる駅の窓

嫉妬の目おんな女の美をさらけ

奈良市

宮口笛生

隙間から春がこぼれている二月

さようならに時間持たせて船が出る

ギャンブルと知ったら馬も走るまい

笠岡市

松本忠三

コーヒーで時間稼ぎが席を占め

目配せをお呼びですかと女事務

世情には疎く学識経験者

愛媛県 村上旭童

出稼ぎへ気丈な妻がいてくれる

おっさんの酔い共産党と肩を組み

今日食えるだけは稼いでくる男

大阪市 西川誓二

何は無くも妻の笑顔と子の寝顔

男かと紛う姿に腰の線

源平の盛衰写した加茂の水

芦屋市 丸川初甫

言い難い本音見破る年の功

一代記明治が生きている女将

行違いご縁のなかったものと知り

倉敷市 竹内翁童

週休二日よそごとに聞く小売商

年賀状と暑中で友情つないどき

母還暦

六十路への坂けわしくも美しき

大阪市 島田雄峯

握ったらはなさんわりに貯めていず

大の字に寝て借金の事思ひ

愛に生きると世間はうしろ指

大田市 藤田軒太楼

留役に割り込む奴も気に入らず

肝心なところをばかして仲人役

青松白砂今じや赤潮うち寄せる

大阪市 今西章雅

中年呆けだろうか脳へ疑念湧き

全会一致なら会長にと思に着せ

争えばきたないものに家事調停

富田林市 木村弥栄子

限界を知ってはかない夜を重ね

ときめいただけで四十路の恋終る

磨かれてガタ来たボディには見えず

平田市 久家代仕男

御隠居に御生大事な壺の艶

横井氏

生活の知恵でもぐらの三十年

芍薬のあわれ廃家も知らずのび

堺市 伏見茂美

さりげない愛の深さは口にせず

花に託す愛活けておく事務机

長女と椿温泉で

風呂好きの娘に負ける宿浴衣

和歌山市 野村太茂津

大君の辺にこそ生きてグアムの兵

雑兵の苦衷ジャンルから聞こえ

日本兵せつなきまでに陛下さま

西宮市

島居百酒

汚れない白さへ嘘が近寄れず

レール通りしか動けない性となり

欲深さを貶し同じ欲をもち

岸和田市

葛城伊三郎

時勢には勝てずと姑菩提心

憎いとて叩いて見ても我が子なり

にせ金の憐れは聖徳太子なり

新宮市

大矢十郎

お早ようさん言うて悔なし人違い

子と並ぶ写真に齢を教えられ

酒飲みの味方のような黒田節

守口市

羽原静歩

フロントで御念の入った御案内

越し方を思う寝覚めの氷雨聞く

辞書を引く二浪の眉の寒々と

東大阪市

斉藤三十四

数ノ子の味を胃袋よう当てず

クラス会だったと嫁のしやべりよう

ねずみぐらいの度胸ねと云われ

鳥取県

森田布堂

暖冬の庭掃く肩に梅が散り

出前一丁しんごい階段昇らされ
地下街で酔うて出口を見失ない

出雲市

原独仙

暖冬の裏をねらっている寒波

毛糸針リズムに載せて好きな人

五十年同棲しててまだ愚痴り

鳥取県

鈴木村諷子

先代がまだ門札に生きている

皺の顔頬かむりしていとおしみ

机上の空論握り合えない太い指

小松市

馬場魚山

ドル・ショック労使の手相接近し

三番叟も観進帳も同じ松

貯金する日の自動ドア強くふみ

大阪市

室谷徹舟

門を出て押えた涙堰を切り

珍客へうらめしそうに猫あくび

煩惱を払えば心満ち足りる

鳥取県

谷無閑

三代の左ギッチョも因果とか

化粧する女鏡に返事をし

初耳も信ずる人で疑がわず

金剛山

富田林市

板尾岳人

風邪へっ引かせてくれぬ金剛山
山の幸小さな望み聞いてくれ
疲れたら休む景色のひとつと

島根県

大森孝華

倅せは女にもどる薄化粧
紫の布団のぬくみ子の温み
全力で勝負する日にある若さ

島根県

景山綾美

昇格(一句)

課内異動軌道修正してもらい
音のない世界があったダムの冬
穴道湖へ沈む夕陽をよごすまい

青森市

織田可津春

吹雪かれて女歩道を見失い
雪のんのんとぼしき今朝の灯をまもる
陽を受けて雪の一片虹となる

松江市

岡崎祥月

神経のいらだち心のすみに住む
欲のない心となってひとり居る

今治市

越智一水

うたがって物を見ている鼻眼鏡
試験地獄妻は受験女中なり

東大阪市

竹中肖二

北浜に土曜日のない小企業
律義なのは銀行の自動ドアー

富田林市

浅川八郎

儼ひとりさてこれからは寝るとする
酒とろり喉を潤す別世界

鹿児島市

土岐トク子

実直が無心に聞いている話下手
ふれぬよう夫の心の小抽出し

東大阪市

竹中綾女

ウエスタンとチャンバラに分かれテレビ見る
薬屋でコマーションシャルの品買っちゃまい

大阪市

飛田好一

女性上位そんな家庭で丸う住み
入園も高卒も居て子だくさん

諫早市

原田明春

原爆も公害も長生き知って逝き
遺言状長生きをして書きなおし

島根県

中島英子

長斗病カルテの歳はほっとかれ
つぐないのない歳月を意地で生き

北川春巢

★
大声で笑うてすんだ四月馬鹿

仮縫い付き背広で入社胸を張り
梯子酒の好きな課長で意気が合い
着発のダイヤ見送りたよりなし

譲られた席へ最敬礼するも年

西尾 葉

画廊出て興奮気味を冬木立

困ったら何時でも来いという刑事

豆もろこ酒仙とまではならぬ我

豆もろこ程よき爛をほめて酌む

豆もろこ茶の間動かぬ話好き

菊沢小松園

死に際はまごう方なき女なる

山に鳥鳴かず川にめだかの影もなく

掌の過去を知らずに握手する

岩一つ廻れば信濃へ下るみち

過去という魔物の前に立たされる

川村好郎

何ごととも釘付けでなし茜雲

医者だけでなしニセものの多いこと

古釘の主張容易には抜けず

ご近所も次々表札代がわり

懇親宴ここでも老いのマイペース

若本多久志

勲章を貰える歳になってさて

言い訳になる流感に責めをさせ

しぶしぶと枯木となって披露宴

未亡人個展を開く顔の艶

保証書を出せば期限がとうに切れ

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

生きて行く溜息福祉のはした銭

新人に家元継がせる黒い策

まとめ役いきなり銚子運ばせる

その嘘へ合槌うっているみじめ

もう春の花活け余寒をうるおわせ

大洲市 米沢 暁 明

小走りは小走りなりに気を使い

無一文一万日をグアムに生き

ゴルフ場僕には見るだけの広さ

今治市 月原 宵 明

何かやりそうな寒中見舞来る

肩書がとれて人間らしくなり

岐阜市 市川 鱗 魚

母一人娘一人春のウィンドウ

絨氈にねている犬の目がにぶり

蛙の子蛙ですまぬ世のうつり

今治市 長野 文 庫

ヘルメット脱げば六十近い人

劇に似たせりふ二度とは会わない気

横着な気持車券で儲ける気

川傍柳 初篇研究

(百五)

627 つらくおもんみるによし丁ハそん

一甫

前田「つらくおもんみるに」はよく知られた言葉取り。「よし町」は岡場所のひとつ、陰間茶屋の本場として繁昌した。陰間(男娼)がいて、男女どちらにもサービスした。

女でも男でもよし町といい

安六義?

芳町はそんだ和尚気がそれる

五・17

馬鹿もあるもの芳町へ大一座

天五香

よくよくの馬鹿芳町に三日居る

一八・32

芳町のそのの類句。意はあきらか。

清「なぜ芳町が損なのか、理由が必要であらう。陰間茶屋の遊興費からみれば、これは老歩で仕切っているが、吉原にくらべてずっと安い。したがって遊興費の問題ではなく、おなじ遊ぶなら吉原の方がずっとおもしろいという意味となろう。」

藤井「男色はもととアブノルマルな楽しみ。男と女の自然の道に反する。女色に興なくて男色一本の者は別として、生理的な男女の交わりで自然の楽しみを果たすには芳町あそびはムダ使いだったと、経験者の

言とりたい。金銭のムダ使いだっただけではあるまい。

高須「礎稿通り「芳町は損」という概念が当時あったので、清説のように「計算ずくの理由」など、別になかったのではないのか丸「藤井説の前半のように、同じ遊ぶなら自然的な吉原その他がよいといったまで、むしろ「つらくおもんみるに」といったお経の文句を引いて、その人物(僧)を暗示したところが句のやまであろう。」

岡田「カゲマ(現代のゲイボーイ)のいた芳町は、清氏は一分と述べられているが、たしか踊子(芸者)と同じ二分だったと記憶する。二分は一両の半分だから、相当な高価、吉原では二ど遊べる。ゲイボーイ趣味の人ならともかく、一時のアブノーマルな興味の人なら、やはり女色のほうが安上りということになろう。」

628 黒ひばた餅を獄屋へ母は出し

其 弓

前田「多くの場合、当時のぼた餅は高価な砂糖は用いず、きな粉のものが多かったから、色は黒くないものであった。黒いぼた

前田喜代人 川端柳風

故

岡崎重義 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

餅は黒砂糖を用いたものか小豆用のもので普通のものより美味のものであろう。「獄屋」はどら息子のはいつている座敷牢である。「母は」で息子に対する母親の愛情が感じられる。

清「座敷牢説賛。ぼた餅を持って行くのは親父がいなとき。」

藤井「賛。黒砂糖は息子の好物か。当時は白砂糖が高価なためか、礎稿のように多くは塩で黒砂糖は高級品のためか、どちらにせよ、そつと座敷牢にはこぶ母親の情。

川端「賛。

雪見舞巻煎餅や甘露梅 田楽は豊島ぼた餅は吉原の類句から、吉原を牢の中でしるばせる親心もあるのか。「ぼた餅」と吉原の関係が不明。

高須「座敷牢の息子へ母の差入れだけで十分ではないのか。川端氏の後半は考えすぎ丸「賛。但し「黒いぼた餅」は問題にする必要がある。といっても自説はないが、「黒い」は玄猪の玄を利かせたもので、亥の子餅をいったものと駄当解している。二

度の月をしまつて牢入りの息子へ、十月亥の日に、亥の子餅を差入れした母。川端氏引用の第二句わかりません。

岡田〓句にわざわざ「黒い」としてあるのは意味がある筈。丸先生の玄猪の、即ち亥の子餅説、さすがです。なお川端氏への質問された「田楽は豊島ぼた餅」の句は共に

大きいので有名……といった句。鎌倉河岸の酒や豊島屋は、馬子までパイ一呑みに来たぐらゐの酒の量が多く、そして田楽が大きい安かつた。また吉原の妓楼で作るぼた餅はえらく大きく、庖丁で切つて食べるぐらゐだったのです。但し、これは主題句には関係はないこと、高須氏のいわれる通り。藤井〓くろいが「玄」で了解。武士階級やインテリが川柳を作つていた当時だから、かかるペダンチックな句も出て我々を困らせるはず。

629 なぜつめるくくくと笹ばたき

具弓

前田〓笹ばたきの句は既出。「まま母の留守にあづきの声がする」(傍一〇)があり作者も同人である。やはりまま子いじめの場面が「つめる、つめる、つめる」で表現されている。

笹ばたき後妻いとまをくれと云う一八・七岡崎〓市子の口寄せで、小道具に笹の葉を使用するので、笹ばたきとも云つたもの。その市子に死んだ実母の霊が乗り移つて、後妻のまま子いじめをせめているのである

清〓賛。「笹ばたき」については、「浮世床」初篇にその詳しい描写がある。

高須〓市子の口を借りて実母の亡霊の怨言

丸〓賛。上五中七の切迫した調子が、実母の霊の怒りをよく表わしている。

岡田〓賛。佳句。

630 蛤をくふと榎が遠くなる

具弓

前田〓蛤をくふは「蛤は初手赤貝は夜中なり」(末一・一)で、婚礼を意味する。榎は田原町の角にあった榎で吉原通りの目印となつた。

四手駕曲る目当の榎木なり

三〇・12

があり、結婚をすると吉原通いが遠のく意思。

岡崎〓しかし婚礼の当夜の蛤は食うものでなく、汁を吸うだけとされていたので「蛤を食う」とにひっかかる。

清〓この句における蛤は桑名の名産だと思ふ。江戸方面から旅をして桑名に到着し、

そこで名産の蛤を食べ、その先は海上七里の船旅になる。従つて一里塚として植えられた榎もずっと遠くなる。以上、駄洒落藤井〓「蛤をくふ」を「婚礼の蛤を吸う」と同意義に認められれば確稿に賛。岡崎氏の説は重要なポイント、小生も始めから婚礼の句と思つていたので。しかし作者の意

が「食う」を文字通りとすれば清説に賛。東海道で桑名から七里は海路だから。陸路を示す目標の榎が立派に生きて、榎が遠く

なるで海路の旅を示している。清氏は決して駄洒落ではなく敬服。問題の句だろう。両先生の軍配が待たれる。

川端〓清説のように思う。飯盛ぐらい買つたであらうし、蛤は桑名の異称を意味するので賛とする。

高須〓清説賛。「その手は桑名の焼蛤」などと江戸でも云つたほど蛤に桑名はつきもの。その蛤を食つて「榎が遠くなる」だから海上七里、榎を見ないわけ。

丸〓清説の通り。

岡田〓清氏の説はちよつと変です。七里の渡しは宮(熱田)——桑名間ですから、江戸からゆくと逆になつてしまふ。桑名で名物の焼蛤を食べてから船に乗るとすれば、「京都方面から江戸の方へ来る」とせねばなりません。それならまだしも意味が通ります。ですが、やはり清氏の説は誤りでした。じつは、この句の蛤を食うは桑名でよろしいが、清氏とは反対に、七里の渡しで桑名を下船して、名物の焼蛤を食ひ、上方あるいは伊勢方面へゆく場合なのです。桑名から今の三重県、むかしの伊勢の国へ入るわけです。従つて一里塚の榎と榎のあいだが遠くなる……という句なのです。この前五十三次の調査に出かけ、土地の古老から聞いた話に、耳の遠い人を「あいつは伊勢のみちだ」というそうで、面白く思いました。

中国肉票探偵談

東野大八

牟田泰子さんを入質に、浅間山荘にたててもった連合赤軍のろう城は十日続いたが、二月二十八日朝十時にはじまった警官隊の強行突入は、放水とガス弾を浴びせ夜六時すぎまでかかった。軽井沢の千早城はかくして漸く落城。入質の泰子さんは二百十八時間ぶりに救出され、犯人五人は全員逮捕されたが、警官隊側の死傷は十五人。戦費概算一億円也。全国民が延々八時間余のブツ通しのテレビ放映に、仕事も手につかず坐りっきりのこの長大ドラマに固唾をのんだわけだが、ホッと一息のその瞬間、私はゆくりなくも中国大陸の入質事件のあれこれに思いを馳せていた。折や由でこの日、大騒ぎをよそに、アメリカのニクソン大統領は上海から帰国の途にたった五分間のニュースが、血まなぐさい山荘のドラマにはさみ込まれてもいたことだ。中国では入質のことを肉票という。民国初

年（大正期）は、この肉票事件の花ざかりで最もウケに入っていたのが、租界だらけで区劃の入り組んだ三百五十万都市上海だった。当時の記録によると、肉票事件は民国十三年（大正十三年）の江浙戦争が草分けだとある。齊燮元を向うに回した盧永祥軍が軍費に窮し商總會に談じ込んだもののラチがあかずついに窮余の一策で金持ちの身柄を奪い、その身代金で賄うという荒っぽい珍戦法を編み出したことにはじまる。この戦法はたしかに妙手であったが、コトを行なう連中が、身代金のカスリをとるのに味を占めはては独立採算制に出る。いうなれば、軍から離れてそれぞれに匪団化したことである。このため三日にあげず市中で入質事件が続発した。しかし、ほとんどが迷宮入りときているので、やる連中はふえる一方で、ために市中の金持連中は一大恐慌を来たした

とある。それがなんと十年間も続くのである。なぜ、こういう肉票全盛期を招いたかという理由は沢山だ。

その第一は、治安が悪くて高飛びは自在だし、賄賂が百発百中を發揮するので、証拠は二の次だ。第二は金持連中が根っから政府や警察を信用せず、金ですむなら自分でカタをつけた方が早いと考えるのが多い。ヘタに届出ると身代金よりその方に余計な金が必要のことになるからだ。三番目は、三合会（広東）や青紅帮（長江）という秘密結社があり、悪い奴はそこにもぐり込めば絶対安全だということだ。こういうことに加え、上海の貧民連中が銀十元出せば平気で殺しを請合うことだ。妙な証人づらをすると即日跡形なく消されてしまうのである。

記録による孫伝芳の憲兵隊長をつとめたというのや、呉佩孚の長江水巡総司令をやったという男、さてはとも上海警察庁長だったというのが匪団の首領だったとある。つかまらぬはずである。

また、肉票事件の便乗組もある。

湖州の絹問屋沈田辛氏には銀行マンの嫡子があったが、朝中国銀行に出勤しようとか家を出たとたんにさらわれた。ところがこの事件の半日あとにその妹も拉致された。民国十七年のその新聞記事があるのでその大捕物帳を紹介しよう。

「八万円の身代金を要求されたが、沈氏がお抱えの私立探偵を動かさしにかかったが、警察が知るところとなったので、合同して捜査中、共同租界自来火街に匪団の一部が潜伏しているとの密報に接し、同処を襲って一味の一人を捕えたことから、仏租界ラヒタロ五五九号に人質と一味の主魁の潜み居ることが判明。中西両国人数十名の高級探偵と数十名の警捕が、防弾チョッキとピストルに身を固めて出動。西洋館三階建ての堂々たる邸宅を取り囲み交戦五時間におよんだ。西探コランデー氏が門扉を破って真先に進み、尤探偵長、金督察員これにつづき、一味を階下から二階に追いあげ、三階に攻め上げて硫黄煙を階下からくすべしによりついに男女十名を逮捕せり。六寸ブローニング銃三丁、コルト銃二丁弾丸数十発を押収せり。人質は三階支部屋に監禁せるを無事故出せり。近來の大捕物なりし」

浅間山莊事件のスタイルにやや似ているが、さてこのような大事件がなぜ解決したのか、上海の肉票事件のケースとしてはことは単純すぎると思つたらそれも道理。調べの結果、絹問屋沈家のお家騒動のとはちつと知れたのである。つまり、二号が嫡子を眼の仇にしてあわよくば消してしまおうと企んだが、本妻がその裏を知って妹をさらった。妹というのが二号の子なのである。この双方の

間で立ち回つたのが沈氏の秘書の李という男で、これが妓女紅菊花という馴染にしゃべつて、事成功のアカツキは身請けしてやるという。ところがこの色街の女に情夫がいて、それが仏租界の匪団の兄哥分ときた。妹の方は共同租界の別口の匪団の担当だが、お先を越して妹までかゝらつて肉票の二人分を稼ぐうとしたわけ。警察に届けたのは、沈氏にくらべて人手不足の二号の打ったテと知れた。話ははやこしいが、とんだ「金瓶梅」で紅菊花というのはと沈氏の三号さんであつたという次第。おわかりですか。

上海の肉票のお目あては銀行家や金店主や薬舗の経営者が多く、官公衙の要職にあるものはほとんど例外であつたというのも、往時の中国氣質がよく出ている。「官は棺桶にして、富は糞尿に等し」と宋の沈括は言っているが、その処生観が生きているのは面白い。もう一つ事実談がある。

上海の肉票稼ぎは自動車手段の一つであつた。城内の珠寶商耽華堂の自家用車は、内から外が見えて、外から内部がみえないガラスが張つてある。別宅が城内警察署の正面前で、お世話になりますと署長以下を御馳走したり小遣いをやつたりしていた。ところが静安寺路の大資産家の八つになる娘がさらわれ、二十万元を要求された。

ところで、汚吏汚官だらけの上海の警察官

の中にも型破りがある。陳徳勝という督察が二十万元要求の文章を眺めて一思案の末、耽華堂主人を訪ねた。そしてこの主人の趣味である集句詩の話をはじめた。この趣味に眼のない主人は、仲間の集りの高点句まで持出し得意の鼻をうごめかした。

「掌櫃（ダンナ）、私もそれをやるんですよ」と取り出したのが二十万円の請求恐喝文。くらべてみれば筆跡はビタリ、同筆跡もいといと。立所に耽華堂御用だ、ときた。調べてみるとこいつは肉票の人さらいの常習犯で、余罪山の如し。銭形平次ばりの陳親分にすれば、妙な自動車のガラス張りや、警察本署の玄関前の家までがつねづね臭いことだらけ。勿論、この家から問題の人質が、おじさんなあーに、とあどけない顔で出てきたことである。この子はさらわれてきて以来、三人のおばさんに下へもおかぬほど大事にされて、犯人が挙げられて家へ帰るさいにも駄々をこねて動かなかったという。人質はいたわれ、これどこの国でもセオリらしい。

問題の集句詩だが、機知に富んだ時政批判で王安石が宋代集句詩の代表的作者とされている。どこか俳諧に似た対句の妙があり、私は日本の付け句の元祖は、もしやこの集句詩では？とも考えたりしている。いづれにせよ、趣味もこうなると悪事の際には要注意ということになる。

「土佐日記」の川柳味

石崎柳石

「土佐日記」は、すばらしい作品である。この小がらな日記のなかに、珠玉のようなものが、いっぱい輝いている。そうしたすばらしさを、従来あまり積極的に認めていなかったことは、まことに遺憾だと思う。(注一)

「男もすといふ日記といふものを、女もして心みむとするなり。」(定家筆土佐日記 前田家蔵本)

何故に、女も試みようとして日記を書いたのだろうか。男は漢文体の日記を書くが普通であった当時、仮名文字をもって書くは女性に仮して日記を書くのか。これについても諸説がある。が、女性として日記は一般的に他人に見られたく無いのが普通である。茲に貫之の異状性が伏在する。これが、不遇なる晩年の貫之の作たる所をことに注目すべきである。ここにも後世の川柳を生み出した源が在る。

「土佐日記」は俳文である。

「土佐日記」における好笑的傾向、貫之は、けつして笑いのための笑いを笑っているのではない。「土佐日記」の描こうとするも

のは、むしろ深い「世の苦(にが)さ」であったろう。晩年の貫之は、あまり幸ではなかったらしい。

「どこか外れている」表現、すなわち俳諧的表現は、貫之の抱懐する暗鬱さを期待しており、かなり和らげてくれた。この上に、あの笑いを撒きちらされたのである。(注二)

「土佐日記」は、彼れが前(さきの)土佐守となつて、大海に放たれた心広さに、東帯を脱ぎ、礼容を撤して、ふくくる腹の内をさらけ出した傍若無人の心の声である。放たれたる一私人の私情を書いた無遠慮な随見随聞記である。

香川景樹によれば、貫之が「土佐日記」を書いたのは七十三才の頃であった。

内容からいえば、ほしいままに洒落地口を連発し、干鮎の口に男女の面接を偲び、女人の裾に海浜の魚介を連想し、傍若無人のそぞろ言を交えたものである。

「二十六日……とかいひて、前の守、今のも、もろともにおりて、今のあるじも前のも手を取りかはして、ゑいことに、心よげな

ることとして出で入りにけり。」

文中に「も五つ」「て」「四つ」「に」「二つ」も同音を繰返している。イントネーションの巧みなる配列に、音調を整え、「けり」と回想的に結ぶ辺り、誠に貫之の筆致の巧緻をみるべきである。

「おりて」は、「庭におりて」「船からおりて」「痴れて」等とも考えられる。

「ゑいこと」には「酔異に」「酔言に」とも解せられ、「心よげなる」は「健康を祝し」「快よげに」「楽しそうに」「気持よく」「お人よしに」等とも説が出される。

「ことして」は、「言して」「門出の祝言など言つて」「行為をして」とも解せられ、茲にも、後の「俳風末摘花」に到る源をも考え得られるものがある。

香川景樹は、亡児の悲しみ、海賊の恐れ、及び滑稽諧謔を、この物語の三大事として説いている。(注三)

「土佐日記」の特色としてはなによりも注意深く考えなければならぬことは、文学意識のことである。(注四)

この中に、著者貫之が、亡き女を偲ぶ心から、その思いをやるために書いたらしい個所のあることも、否めないところである。

思ひやる心は海をわたれどもふみしなれば知らずやあらむ

……なほこそ国の方は見やられ、わが父母ありとし思へば、かへらやうたふぞあはれなる。

これなど文中に散見しうる。

「なぐさめあそび」も、この日記の一特色である。(注五)

「笑う民族文学」として、一方に、やはり謡物語の系統で、尾籠(オコ)物語と呼ぶべきものがある。馬鹿らしい振舞をする人の物語である。後世の川柳作者の中に、この範疇をも見出しうる。

日本人の持っている特殊な滑稽味をば、日本の言葉で「滑稽」といつているが、其がどう云うふうに出発して、どういふふうな道筋をばとって来たかという事について、道化だとか、滑稽だとかいわれるものの育つて来る道筋をば、今までは書かれた物語の側からばかり云って来た。

が、滑稽歌・滑稽・川柳は、みなこれの裡に考えられよう。(注六)

「土佐日記」の中に示された痛烈な諷刺、放埒な哄笑、漢文調の簡潔な表現、枯れた筆致、それにもまして、土佐の荒海を舞台とした、いわば「海の文学」とでも言えるようなスケールの大きな男性の文学……久松博士の分類法は、これらを示していよう。(注七)

土佐の国から舟出して(承平四年十二月二十一日)翌年二月十六日に、京に帰るまでの日記ではあるが、要するに、女性への仮託ということは、さして深い理由はなく、戯れて書いたものと見てよからう。その情趣を包む軽いユーモアが従となつていふように思われる。

若しそれ先人の屢々口にしてゐる滑稽諧謔という点に至つては、単に言語上の遊戲として斥けたい。要するに、土佐日記の価値は、絶対的即ち文学的価値よりも、相対的即ち史的価値の方に意味が深い。(注八)

新国字たる仮名をもつて表現された文章が、如何に自由便利であるかが、この日記によつて証拠だてられた。

この日記の研究は、元和・寛永の頃から盛んになつたようである。(注九)

「土佐日記」注釈中、最も注目すべき研究書の岸本由豆流「土佐日記考証」は、この日記を推称して「文かかん本にすべきは、この日記にしくはあらじ。」とも謂う。(注十)

「香川景樹の土佐日記創見は、その心を慰める為に滑稽を交へて書いたものと云ふことが書いてある。『それは名説であらうと思ひます。』と芳賀矢一先生は謂われてゐる。(注十一)」

以上諸家の説を挙げて来たが、土佐日記の中には、後世の川柳を生み出すべき源を多く見すのである。日本特殊の川柳は、日本精神に拠る貧富協調(注十二)の詩でなければならぬ。

注一、小西甚一「土佐日記評解」(序)

注二、同(俳諧精神)

注三、日本文学全史、平安朝文学史上巻、五十風力「放たれたる文学」

注四、今井卓爾、岩波講座日本文学史、古代の日記・紀行文学

注五、斎藤清衛、批評文学、日本文学大系

注六、折口信夫、日本文学の発生序説
注七、白田甚五郎、野村純一「全釈土佐日記」

注八、鈴木敏也「概観日本文学史潮」

注九、池田亀鑑「日本文学大辞典」の中注十、同

注十一、芳賀矢一「国文学史十講」

注十二、阪井久良岐「川柳久良岐全集」

〔附〕

一部の注解者は、言語表現上の技巧のある所を、すべて滑稽・諧謔・皮肉なりとみてゐる。これに対して高説がある。

貫之もこの厳密な対句を墨守して、新撰和歌集の序の如きものを作っており、この四六文にならつた対句の多い国語文を、古今集の仮名序、大井川行幸、序において試みている。土佐日記にもこの技巧のあるのは当然である。(注十三)

注十三、中田祝夫「土佐日記」新注国文学叢書

西出一栄句集

「ねっくれす」

送料共 六〇〇円

同人吟

秀句鑑賞

— 前月号から —

橘 高 薫 風

先日、霞乃先生からお便りを頂戴した。

最近あちこちで句の鑑賞をなさっているのを拝見しますが、鑑賞に親切すぎるくらいが感じられます。十七音字の川柳ですから、深い意味を表現することはなかなかむずかしいのです。鑑賞の深追いは、作者に、これですとすると安易な気持をおこさせる弊をもたらします。」

という内容のものであった。路郎先生が亡くなってからも、こうした高所からの目で、大きな指導を得られる私は仕合せだと感じたことである。

甲斐性がないのに既製服がいや 浜田久米雄
「ええかっ」という外見で物事を律しようとする近頃の青年にこういうのが多い。

俺が俺取り戻して酔うている 志賀木石
素面では何もいえない自分だ。酔うといいたいことがいえる。この時の俺が本物の俺なのだ。それを他人は酒がいわせるのだと解釈

する。

バトカーの今日はドライブめく日和

村上旭童

日和も日和、事件とてない。そういう感がうまく出ている。天下泰平だ。

閏年一日さみしい日がふえる

谷垣史好

閏年にふえる一日は、奈落のような二月より、四五月にふえてくれればよいのにと思うのが人情であろう。世間も二月の下旬には暗い事件が起りがちである。

もの足らぬほどほめられる孫娘 水粉千翁

初孫産まる、との前書のある五句の中の一
句である。大仰ないまわしから作者のよ
こびがじかに伝わる。実に卒直な作者の心情
が五句のすべてに出てくるのだが、作句には
こういう気持が一番に大切なものではなからう
か。

山陽新幹線試乗

58分でここ大阪府岡山市

不二田一三夫

路郎先生は、山本素郎さんに、時事吟のあ
るうちは川柳はくなくならないよ、と仰った
そうだが、句のいのちが短いから、高度のも
のでなければ存在価値は少ない。この句あた
りでは、つばにはまっけていて申し分がない。

清荒神代参させて気をやすめ 西出一栄

清荒神は、大阪の近郊にある竈を務める神様
で、近在諸人の信仰あつく月詣りが多い。私
も代参をしたことがあるので、この句にはに
んまりさせられた。

足の爪切り切り話を聞いてくれ 山内静水
風呂上がり、足の爪を切りながら話を聞い

てくれる人物は、町会議員の叔父貴か、飲み
屋の女将か。人を見下げて無礼千万な仕打ち
だが、さすがの身にはかえって応揚に感じられ
るのかも知れない。

地に還るから墓石も傾けり

小林孤呂二

万物のうち地に還らざるものはない。すで
に地に還った人の霊をまつる墓石も、やがて
土に還ることであろう。作者は墓石に意志を
見たのだ。

本職をたずねられてる芸の幅

松本忠三

川柳家の中にも、踊ると踊りの師匠をはつ
とさせる程の人がいるのを知っている。併
し、そういう人はそれをおいそれとは見せない
ものだ。小器用にこなす宴会用の芸達者は
増えたが、こういう人物はだんだん少なくな
る。

ロボットに劣る動きを繰返し

堀江正朗

盲目の作者なれば殊更身にしむ思いがする
が、人間誰しもこの通りなのだろう。

軍歌なら何でも知ってる人さみし

宮口笛生

半生を軍隊で過した人には軍歌は血の中に
まで溶け込んでいる。当時は、絢爛として力
強かった。今はさみしい。

借金を払えばむこうから笑顔

出原敬一

人間心理の機微を捉えた。

人生は黙り而して独り旅

石倉旅風

作者は、そうだ、そうなのだと頷きながら
人生の一人旅を続けておられる。この語意語
調から推して、各駅停車の旅に違いない。老
境の淋しさだ。

花嫁の

高 鷲 亜 鈍

花嫁の後姿は哀美

貸衣裳いろいろ世話になりました

銀線の五月雨ついて嫁入りす

末娘の花嫁たしかめかねた老父の眼

花嫁の夢果したいきつね火
花嫁の背なへ老父の眼が痛し
ほんまかいな狐の嫁入り雨の日の
花嫁は去りゆく娘の姿にて
つゆ雨に意味をもたせた軟化症
老病の襲にめりこんでいく梅雨
崖くずれを秘めてやさしい雨の足

「旅人」以後の

麻生路郎作品

16

三十五年四月号

不朽洞句帳

脂ぎった政治家を憎むことの日日
政治家の今日も漫画でひねられる
錯覚の上にあぐらをかきはじめ
老翁で一人前になった気さ
政治家の裏切る外に道もなく
お彼岸に病人起きて見るといふ

伍建君を悼む

ランーになったかきみの姿なし

杏林川柳会「人出」

ターミナルの人出プランを変えさせる

三十五年五月号

不朽洞句帳

街のボスだが 妓にはたのもしく
女医と女医ジョッキへ誘う間柄
愛人はストのハチ巻してて会い
かくあれとのんびり寝てるウチの猫
なかなか死なない しぶとさで老い
刑務所もうらら 囚人草むしり
生きるための この水この水
南海電鉄川柳会「支線」
支線勤務又松茸をことづかり

(傍 島 静 馬)

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

大臣になるやも知れぬ児が生れ

両川 洋々

何の潤いもない、ギシギシと砂を噛むような世相の中で、こんな句を発見すると思わず人間らしい微笑を取り戻して、やはり川柳は庶民の詩だとの感を深くする。

老妻の鼻しみじみと置き炬燵

吉結 百水

子供達もそれぞれ成人して、巣立って行った家に残るのは老夫婦二人きり、ある日、背をまるめて炬燵に向い合った女房をふと見やれば、何という鼻の低くさよ。よくも三十年辛抱してきたものと微笑が湧く。相手は相手で「よくもこんな甲斐性なしと……」思っているかも知れぬ風景、ユーモラスの極致？

慰籍料の金策出来ぬまま切れず

ふきあげ虎城

何という外題だったか、夫婦喧嘩の度毎に「出てゆけ」と怒鳴る夫に愛想を尽かした妻が「それでは永々お世話になりました」と別れを告げて出て行こうとすると、何のかのと文句をつけて出してくれない。「そんなことを言ったら出てゆくところがない」と抗議をすれば「出口がなければ此処に居れ」でオチになる落語があるが、この句も金策不能は口実で、妻への未練が充分うかがわれて面白い

子種ある証拠は妻に話されず

中谷 利美

結婚してもう十年、何不足のない生活だが子宝に恵まれない夫婦の間では「お前がわるいのだ」「いいえ、貴方がわるいのよ」と口論の種になるのはいつもこの一事。実の処、夫の方は外に子供が出来ているという嚴肅な事実で自分がわるくない証明は出来るのだが……それは禁句のもどかしさよ。夫の顔が眼に浮んでユーモアを感じさせる。

又めげる修繕賃を貰い兼ね

山田 止水

「めげる」は、中国地方の方言で「これわる」という意味。この場合、時計等に類する

機械ものであるが、毎日のように新製品が発売される時世なのに、十年以上も経った古いマシンを修繕に持ってこられる迷惑そうなお主の顔がユーモラスに浮んでくる。

はよ帰ってほしい客にも茶をすすめ

川上 久司

招かざる客に出ず、最初一杯目のお茶は、しぶしぶの態。撃退を期してからはやたらのお茶攻め、「奥さん、もう結構です私すぐに帰らせて頂きますので……」と言わずすまで攻撃の手をゆるめないという戦術もある。

鑑賞後述

私の秀句鑑賞が近頃少しマンネリになって来たという、ご忠告を頂いたので今月は一寸趣を変えて、川柳のジャンルにもこうした尊い人間詩のあることを究明してみました。

万的・杜的共著

句集「的」

送料共 四五〇円

若本多久志句集

「老いの坂」

送料共 五六〇円

岡田 甫著

川柳東海道 上

— 日本橋から大井川まで —

〔付〕鎌倉・伊豆史跡めぐり

前号の後記で岡田甫先生の「川柳東海道」は贈呈していただけだと書いたが、読売新聞社のほうから贈呈することになったそうで、岡田先生は多くの住所を新聞社へ知らせてくださった。

手にして、まず美しい本だと思った。六百余ページ、そして実に安い。発行所が新聞社だからこれだけの本がこのような値で出せるのだなとوراやましかった。われわれの個人句集ではこうはいくまい。

著者を紹介しよう。

岡田甫（おかだ・はじめ）本名・千葉治。明治三十八年、東京に生まる。昭和三年早稲田大学卒。専攻・江戸文学、江戸風俗研究。昭和二十六年より近世庶民文化研究所を主宰し現在に至る。著書「全釈江戸三大奇書」、「川柳末摘花詳釈（三冊）」、「珍書探求」。「初代川柳選句集（岩波文庫（二冊）」）その他とある。

現住所・鎌倉市大町四ノ四ノ二七。電話鎌倉（〇四六七）二二—二五三九。

序のはじめに

— 旧東海道を歩いて、もう十年近い。同じところでは五回か六回もいつている。つまり本書は机上の漫歩ではなく、筆者が実際に見てまわったその報告書といっている。

また、こういうことも書いてある。

◇ガイド・ブックに記載されている詳細な説明——たとえば寺の開山、神社の祭神、河川の源、山の高さなど——は、必要のない限り省略した。また江戸時代や明治以降の有名な人の墓なども、文芸関係以外ののはほとんど触れない。本書だけでも事足りるがその意味からガイド・ブックの併用を望んでおく。

（後略）

とあるように、川柳家いがいの旅好きの人にもたのしい本である。

ある場所へ行く。どのバスで、なんというところで下車して、人にたずねなくても本書さえあれば、その目的地へ行き着ける。本書はこのような近代感覚を盛った「道中記」でもあるのだ。

かといって、ガイド・ブックや紀行文でも随筆でもない、序にもあるが、その「中間を採用した」とある。古川柳のあつかい方も適切で、広重の絵や東海道名所図会が当時をしるのぶすがともなり目もつけれない。ほかのような雑文屋にはもってこいの好著で、これからさきもウンと参考にさせていただくことになるだろう。

それから序詞がシャレている。往時をしるびながら読んでいただきたい。

この道を歩いた。

— 日本武尊が、坂上田村麿が。源頼光やその四天王が、源為義や八幡太郎義家が。この道を歩いた。

— 山部赤人が、在原業平が。西行や宗祇が、鴨長明や吉田兼好が。この道を歩いた。

— 「更級日記」の著者が、「十六夜日記」の著者の女性が。この道を歩いた。

— 源頼朝や義経が、平維盛や宗盛が、足利尊氏や新田義貞が。この道を歩いた。

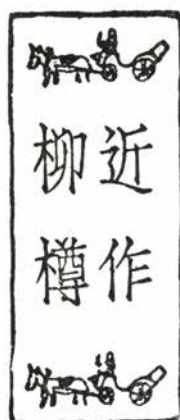
— 武田信玄や今川義元が。織田信長が。太閤秀吉が。徳川家康が。この道を歩いた。

— 熊野御前が、虎御前が。巴御前や静御前が。淀君や千姫が。この道を歩いた。

— 江戸の将軍に拝謁のため南蛮船の多くの紅毛人が。シーボルトが、琉球の中山王が、朝鮮の使節が。そして八代将軍のころに象までが……。この道を歩いた。

— 賀茂真淵が、林羅山が。西鶴が、芭蕉が。司馬江漢や渡辺華山が、北斎や広重が、蜀山人が。そして十返舎一九が……。この道を歩いた。

▼発行所読売新聞社（東京都・大阪市・北九州市）定価六五〇円、送料一一〇円。全国有名書店にもあります。（下巻は八月に発刊予定）（不二田一三夫）



菊沢小松園選

今治市 薦 本 昌 道

女という字を妻から消したい日

喪服には喪服の色が合うルージュ

取るに足らぬ血すじを楯にとる落ち目

唇を接近させるコマーション

手袋の白さが目立つ表彰日

岡山県 嘉 数 千 代 香

何もないてのひら冷たい風が抜け

エンゲージリングははずせば自由な日もある

ゼニに脊を向けて仕事の腕が冴え

曲っても意志を通した釘が錆び

ためらいもなく裏方となる妻がいて

島根県 堀 江 芳 子

わがいのち燃やす夫の白い杖

満ち潮に似た倅を抱きしめる

小言飲み込んで血圧上がりそう

黙々とうどん 夫婦にまだしこり

寝不足を土産のように子が戻り

竹原市 三 宅 不 朽

闇夜なお闇に野良犬呼び合うて

切株の雪そのままできて欲しい

野仏の抱かれてみたし背のまる味

マイホーム餅のふくらむほどに似て

野辺送り生家の方へ道を選び

大阪市 阪 上 十 止 庵

空気がうまいだけで青年生きたれず

人の死を葬儀社きれいにまとめ上げ

五秒ほどテレビにうつった日の騒ぎ

夕陽拝むみなにごともなき顔で

貯金箱ふれば小さな夢の音

大阪市 小 谷 葉 子

思い出の渚 多くは語らない

たそがれの道 一人の道となり

風みどりそむく女の後から

白紙重ねて明日に酔うている

甘えたき声 寒風の中走る

大阪市 柳 原 静 香

聴えない悲しさ洗濯物ぬらし

硝子戸の影さえ老いが見えてくる

未熟児のハンディもなく宮参り

電化して女不徳の影を持ち

島根県 榎 み どり

風紋の命たしかめる四季の風

水たまりすんだ青空うつし取り

さりげなく廻してみたい壺の花

わらしべに抱かればたん雪をみる

大阪市 黒 田 真 砂

距離置いて或る日眺める夫の癖

私にもあった十九の春の眉

揺るぎない愛と信じる暖かさ

クラブからお歳暮が来て少しやけ

尼崎市 中 谷 利 美

先客の残した菓子へ足して出し

父さんと僕は違うと喜ばせ

昔なら腹は借りものそれで済み

可愛がりようも手荒な男の子

新宮市 大 矢 富 子

燃えている目が愛を逃がさない

妻となるチャンネルしかと握りしめ

後悔をせぬ的に射る矢が当り

旧姓のままで通帳残がゼロ

今治市 古 野 伶 人

老夫婦もうへそくりのあても無し

どうやって顔を洗うのつけまつげ

かかる時いける口なら口説くの

男の子産むまで腹を休ませず

松山市 谷 の お

老人のアベック素うどんですませ

他人には邪魔になつてゐるマイペース

同病の相あわれんで融手書く

脱皮することの出来ない殻を持ち

呉市 植 田 英 詩

チリチリリ鈴を鳴らそう千羽鶴

前略後略旅から妻へペンを取り

三度目は仏の顔を捨てて勝ち

裏切らんで欲しい証書へ印を押し

鳥取市 大 塚 豊 生

病床の友へ寄せ書きの文字集い

だんだんと個性どおりの庭となり
進軍のラッパどこかで鳴りひびく
発車ベルやっと一人になれた旅

島根県 錦 織 文 子

無人駅手旗を振った思出も

うますぎる話へ二の足踏みつけ

合理化も寂し故里の無人駅

メロディに乗る妖精のスケーチング

岩国市 村 井 西 合

いたわって頂くゆめはとうに捨て

初恋を絵本にはさむ子にあわて

倅せは恋の墓標が見当らず

自分だけまず善人になりたがり

東京都 宮 崎 美 津 子

楽しさもいらいらもあり美容院

受験前みんなヒッソリ籠りきり

ためらってまんざらでない赤を着る

青森県 波 た だ お

校歌にも公害がしむ世が哀れ

税務署員も望んでいる減税

四秒が決めた世界一の男

竹原市 簀 田 淨 美

どしゃ降りもあなたに逢える下駄の音

スケールは女の私にない広さ
愛される妻への努力惜しむまい

岡山県 武 元 柳 子

とぼとぼと歩けば影もとぼとぼと

だまされて楽し今夜の子の手品

熱下る主婦に厨の乱れとり

大阪市 西 本 保 夫

銀行ローンなら平社員にも貸してくれ

天の声辛抱しろと平社員

平社員に強い味方もやはりあり

豊橋市 鎮 浪 翠 月

鏡台をのぞいて今日を終えた顔

嘘ついて心の隅をのぞかれる

セーターを編んでもろうて肩をもみ

高知市 竹 崎 寛

友情を噛みしめてみる厚いテキ

寝る覚める始まる一日それでよい

柿若葉過疎に展がる蒼によし

竹原市 楠 貞 子

灯を消してからの涙が音を立て

遠電話十円玉の音がせく

言い勝って見たとてわびしさだけ残り

備前市 武 内 雅 堂

香水の匂う女に影踏まれ

人妻の炎が背に突き刺さり

歓迎は知らず夜汽車の人となる

大阪市 堀 口 欣 一

手を振って公判廷に入る背広

署名ならOKカンパはお断り

仙人にもならずにグアムの帰還兵

樫原市 岩 井 本 蔭 樺

同僚の視線を意識して辞令

札束を垂れりや人魚が釣れてきた

先発へ小才のきいたのも加え

鳥取市 両 川 洋 々

大山スキー場にて(二句)

手の内はみんな教えたのに転び

スキーヤーと別に旅館も雪を待ち

金ペンのプライドまずい文字へ拗ね

和歌山市 樫 村 ふ み よ

やせたいと肥りたいとが乗るハカリ

もう少し見ていたいのに消える虹

冬ごもり同士電話であたためる

新潟県 高 野 不 二

熱いそば早く喰うのも芸のうち

大和魂もやしつづけた三十年

とって置くくせも明治のせいにする

竹原市 脇 本 政 己

うらぶれて隙だらけなり冬の蠅

つつがなくわがかあちゃんにもててます

子をなさぬ男と女の茶が冷える

竹原市 生 信 笑 子

アベックと背中あわせの汽車の旅

呼んでいる声を子供に教えられ

何もかも知りたい未知という二人

河内長野市 井 上 喜 醉

退職金もう嗅ぎつけた客が来る

隣とはデットヒートの電化品

下ッ端は嘘をついても無理はせず

島根県 谷 岡 芳 枝

正装の鶴が忘れた足の荒れ

飾りつば一枝さされた事もなし

雪国へ雪を給わぬ不安抱く

島根県 東 原 福 子

過疎に骨埋める覚悟畔を焼く

五十路のうきぐもになお夢をかけ

老らくもいつしか多忙に巻きこまれ

島根県 岩 田 三 和

過疎はよしキツネタヌキのお山なり

オリの中一夜に千里走れない

阿蘇へ来て地球のヘソをのぞいて見

島根県 鳥屋とみ子

うちかけの鶴も舞いそう披露宴

かくし芸出つくし軍歌で肩をくみ

生きぬいた自信それぞれ胸を張り

今治市 渡辺南奉

公約どころか会釈さえしてくれず

唇をむすんで男耐えている

女医の目にどの胸板も頼りなし

羽曳野市 大峠可動

人間の試練か風の子冬を呼ぶ

振りむけば私は母の視野にいた

一人では惜しい人生妻娶る

東大阪市 藤田飛鳥

北風に向かって風を確かめる

交わらない心信じて遠くいる

浴場の桶は裸の音で鳴り

米子市 増田竹馬

喜こんでよいやら医者代ロハの歳

ハネムーン「只今」までの親心

産院へ名無しの孫に逢いに行く

今治市 伊藤一郎

奥さんの制限分を二号産み

宵越しの銭は持つなど値上げされ

クラクション無視してペタルマイペース

今治市 今井松花

特急が走れば普通減らされる

寄り添うて歩くに丁度良い寒さ

一票が今日の値上げへ続いてた

今治市 原田輝親

冬眠の亀に似て来た退職後

濃霧欠航四国矢張り島だった

足跡は少女と犬と春の浜

和歌山市 垂井千寿子

天罰を分け合う人が居る安堵

メロドラマ見てて瞼のむずがゆく

羨まれるより愛されたいと女言う

和歌山県 ふきあげ虎城

約束の時間信号赤となる

校庭を青空のない風が抜け

雑音として心の中で聞き流がす

八尾市 高杉千歩

眠るには早く眠たき留守ひとり

束の間にみぞれにかわる戎櫓

失恋を聞いてほしいのも女

八尾市 高 杉 力

陽だまりへ猫は昼寝の場所を変え
春風よ吹け水色のブラウスに
星のない空にふるさと浮かび出る

愛媛県 小 山 悠 泉

花一ぱい咲かそう庭はせまくとも
子に罪は着せまい産れて来た命
背伸びした暮しへひびくドル・ショック

羽咋市 三 宅 ろ 亭

人間のもろさよ刺に負けており
悔蔑への反発抑え正座する
結ぶ神離別の役も背負わされ

新宮市 熊 野 溪 水

平社員一直線に睨まれる
昼間から電気をつけている間借り
お茶さめてまだ見つからぬ妥協点

新宮市 川 上 久 司

言うことがないので笑って済ましとき
本当は警戒してる眼に出会い
宙吊りになってみの虫死んでいた

東大阪市 落 合 思 月

さりげない仕草も人妻らしくなり

頑固さがとれた夫へ気をつかい
めおともめつづけて子等も寄りつかず

尼崎市 小 林 文 月

七十五才で会社を勇退(二句)

機械にも黙礼して去る退社の日
使う人なく持ち帰る五ツ珠

守口市 岸 本 豊 平 次

べからずの鎖の中で狭く生き
四捨五入されたら消えてしまえそう

鳥取市 有 田 鹿 子

風紋の魅惑に踏むのをさえぎられ
コーヒーを入れて入試の子を覗く

七尾市 松 高 秀 峰

四次防次男三男気にかかり
リハーサルして見たいようなよい天気

和歌山市 増 田 め ぐ み

愛姉昇天す

明日のない姉にも除夜の鐘がなる
咲き終えし花の命をいかにせん

大阪市 藤 田 頂 留 子

押しピンの足りないピラのふくれっ面
脳みそのスパーほしい作句難

大阪市 塩 満 敏

禿げてきたかはりにひげでものはそうか

駆けこんだトイレ只今故障中

鳥取市 近 藤 秋 星

寒がりへ暖冬という贈り物

齒ざしりの癖のある顔には見えず

鳥取市 岡 川 夏 風

例えばの話が妻をあわてさせ

妥協した男それから小さく生き

山口県 粟 井 さ ち え

つましさとイレも花一輪匂い

洗車したばかりに通勤歩かされ

鳥取県 林 露 杖

ハラハラと垣根に縋る冬の蝶

膝の猫不意に爪だす勘違い

大阪市 岡 本 まさひろ

グアム島から天子最後の股肱の臣

帰宅してから明日帰るちう便りつき

兵庫県 高 橋 近 江

錠剤の一個が総歯を外させる

新米の仲人酔いが廻らない

岡山県 山 田 止 水

老妻に横取りされていた眼鏡
所得税減って淋しい顔になり

今治市 大 本 バ ッ ト

喧嘩しに来たよな孫で疲れ果て

ブランコの露拭いてやる孫を持ち

今治市 真 山 国 彦

お茶を出し酒まで出して菊を見せ

坐禅でも組んでみますかパンタロン

寝屋川市 福 富 隆 子

団地での豆蒔きささやくように蒔き

色気抜き喧嘩も老いのたわいなし

松原市 玉 置 重 人

用心に用心をして類焼す

ままならず脳みそかえて見たい時

福山市 酒 井 日 出 夫

音楽を聞く僕の耳眠っている

煙り立つ炭焼釜へ木コリいた

大阪市 平 井 露 芳

むらさきのふとんへ鬼も寄りつかず

横井さん帰る

三十年神天皇は生きていた

新宮市 川 上 純 滋

教育ママ子の能力に気がつかず
絵ハガキにして送りたい家を建て

釧路市 泉 きよし

物価高なげき貧乏ゆすりする
鳩時計泣く子をあやすように鳴り

大阪市 河原林 比呂路

撓だこの掌に生活の過去ひそむ
見送りの数から見れば左遷らし

守口市 野 呂 杜 月

代筆も出来ず齒痒ゆい娘のレター

三度目は呼び捨てにして振り向かせ

島根県 安 達 小茶坊

さりげなく言ツた一言役に立ち

水たして仕事始める金魚売り

宿毛市 山 本 窓 花

ママの顔じつと見上げて飲むお乳

花の実も地に還ること知りながら

堺市 栗 本 藤 持

地下に入る店新しく人を吸い

天下り役人面がまだ抜けず

新宮市 小 林 暢

指人形今宵は誰の手に踊る

いんぎんにお帰りでつかとほり出され

大和郡山市 森 田 カズエ

閑居する指でないのに爪が伸び

話し合い金のところで行きづまり

新宮市 上 田 君 代

どこまでがうそかまことか週刊誌

還暦を迎えてはでなパンタロン

島根県 安 達 潮 音

抽せん日現実と夢の距離

宝くじ見果てぬ夢をかけてみる

大洲市 堀 内 暁 風

反省もせずに強気の三分の理

神前の誓い忘れている家裁

氷見市 関 美 子

半値の菜とうが立ってるとは云わず

ゲバルトを卒業産着ぬう素顔

大阪市 白 石 潔

病棟から霊園の煙今日も見え

限界と勝手にきめる怠け者

仙台市 川 村 映 輝

ご近所の他人に今日も世話になり

愚に徹しきれないままに年をとり

鳥取市 藤 本 和 宏

久しぶり学歴の差を知らされる

鳥取市 佐々木 静 泉

前略元氣だ金送れ

澄んだ瞳にわびつつ通信書を渡たし

鳥取市 藤 本 佳 女

大阪市 花 田 繁 子

食費さえ払わぬ子の税払わされ

日の丸が三本上がり茶の間沸く

高槻市 山 田 ス ミ 子

大阪市 松 岡 進

まだ子等に頼られるのでばけられず

何はさて生きるプランは金が要り

タクシーも右へならえと云うて上げ

二本のレール新幹線は信じ切り

大阪市 今 井 隼 人

予期せぬ言葉を電話の遠くにきこえ

和歌山市 島 本 泰 子

物価高買物籠にぐちを入れ

大阪市 内 藤 ます 糸

花嫁の顔横眼で見座り

鳥取県 福 田 陽 山

切れ目なく値上げの大阪波やって来る

大阪市 村 島 秀 村

泉佐野市 大 工 静 子

病院で明けくれねむる身のつらさ

大阪市 鈴 木 生 仏

癌とは知らず神様はついでます

弘前市 小 山 内 貞 男

子供より孫と気の合う年に成り

大東市 広 畑 賛 平

化粧品女に性のある限り

大阪市 新 川 貞 祐

怪獣だけ上手に孫は書いている

大東市 岡 部 シ ゲ

生きて居るあかしの様に年賀くれ

鳥取市 藤 本 恵 子

ジャングルの苦勞を語る皺の数

大阪市 本 間 満 津 子

女性上位だんの母から学びとり

鳥取市 藤 本 鎮 也

ふくらんだ蕾のそばで陽にあたり

ざっぴつしゅんじゅう

・雑筆春秋・

服飾と川柳

宮西弥生

編集部から、ファッション・デザイナーとして、何か書けとむずかしい注文でした。

マダム・マサコ先生がおっしゃるように、だいたいの男子服はイギリス、婦人服はパリをもちに世の中へ出てくるようです。

最近の川柳塔か玉句を拝借しました。

LLの売場大きな字で書かれ 春 巢

わたしの方はご注文ばかりですが、このような方にはなるべく細く見られるように苦心をします。

背広なんて盗作スタイルだとさ 一三夫

古い殻を脱皮していく近代感覚からいきますと、男性の背広は盗作スタイルかも知れません。

ミニマキシ漫画のように見る明治 比呂路
こういう見方もあると思います。また若い方からいうと背広を盗作スタイルだときめつ

け、ここに新旧の姿が浮かび出ます。

ディオールの靴下穿いても同じ足 真 砂
さすがにモードショップの経営主らしくするどい観察だと思いました。

マネキンが水着を脱いで秋となり 鶴 翠
人形は美しいスタイルです。イヤ美しすぎますよ。

ハイミスの孤独おしゃれでまざらわす

文 秋

こういうお客さまこそ一のお得意先き。

衣替えまだ派手とせぬ更年期 柳 児

このような方もありがたいのですが、

晴れ着より働くふだん着板につき 窓 花

これではこちらが干上がってしまいます。

イメージチェンジそうですめがね買う

千 歩

服装もかえまだその上にメガネまでしてイメージをかえます。これが女の最大のよろこびではないでしょうか。

若返るつもり街へマフラ換え ろ 亭

ネクタイを派手に男の抵抗か 千寿子

男の方の気持ちがよくわかります。しかしおしゃれは女性のいのちだと思えます。

夢いなくファッションショーの中の顔

葉 子

ファッションモデルも、あれでなかなかきびしい生活なんです。

優雅な職業にある私どもにも決して現実はいきびしきがあります。常に他店に負けないうことと、伝統ある歴史の誇りをモットーに、ひたすら販売をしなければ

ならないのです。

その一つとして従来から持ち廻り制度があつて、じつとしていながらお客様をお迎えするということではなく、車で積極的に販売を行なう所謂セールスマンのことです。

勿論デザイナーが主となって、毎年季節ごとに輸入舶来服地と一緒に売場から狩り出されては注文を取るに鯨鯨として働らかれます。

一口に云えば非常に簡単にですが、元来車に弱い私は、一日中車に缶詰めにされて酔わされ、その上にその日によって何処へ行くのかも分らない時などは、何時のまにか遙か吉野まで連れ去られた事もありました。

消費時代の現代は、先きへ先きへ早廻りするのが商売のことかで、何処へ行くかも分りません。こんな訳で昼食を当らない時もあるれば、おトイレも御無沙汰しなければならぬ破目もあるのです。それにつけても、「女性」という点で一番困るのがおトイレです。

たまたまある寒い日のことでした。売上げもなく、積んだ商品も車に入れたままに降ろすこともなかった帰りのことでした。だんだん私は「33」（これは私どもが常に使っていますおトイレのこと）が辛抱できなくな

り何処か止めてほしいと云つても全然無視。それでも我慢していると気が遠くなりそう

で、これではいけないと思つた時、ちょうど車は中之島附近を走っている時だったので、一瞬某ホテルの建物が見え入り、飛び降りる

や否や、脱兎の如くホテルへ侵入、つかつかと「いらっしゃいませ」とボーイさんの声を

背にして33へ。ようやく気を静めて戻って来た時、先き程のボーイさん唯ニタニタと。身のすくむ恥かしさとはこのことでした。

またある時は車のエンジンも快調、停滞もない時などは、不思議に売行きも良くて、適令期のお嬢様の居られるところでは、全商品を降ろし、あれも、これもと親心の深さを見せられ私どもは有頂天、声の調子、顔の表情までくすし喜んだものです。遂に思いがけなく御注文をいただいたりしては、人間とは正直と云うのでしょうか、言わなくても良いのに「仮縫いにお伺い致します」と調子のよいこと。

悲しいかな今度は逆に車は使わず、出来るだけ安く速い交通機関の利用などと全然無理解に憤慨したりして、ぼそぼそと知らない新市街のマンション、パンションを探さねばならず、ようやく仮縫いも済んで引き上げる頃は陽も傾むき、きびしい仕事を選んだものと侮れたり、弱気になったりするものです。でもこれが動機となって私にはまた一軒のお得意様としての誕生。何よりも心強いものを感じさせられます。

本当に独身者でなければ続かない仕事だとつくづく感じている今日この頃です。

結婚して家庭にでも落着けばとても一日として主婦業に耐えられなくなるのではないかと思うだけ好きな道なりに働き甲斐のある仕事にフアイトを燃やしたいと思っております。

貝になってみたいゼロの日

流行へ女の夢が突っ走る
年よりも派手を進めて喜ばれ
適令期抱えてあわれ女親
柄に迷いデザインにも迷うのも女
自信のないスタイル柄で着るとし
(フアツションデザイナー)

ヒント言

鈴木村 諷子

人間の値打をきめる上に
その人が美貌であるということぐらい
たいした問題にならぬ

○
やわらかな心からやわらかな言葉が出る
明い気持の人が明い言葉を発する
美しい言葉は美しい心から洩れる
言葉は心の鏡である
聞える言葉から見えぬ心が判る

○
華美な心が派手な身なりにする
派手な身なりが華美な心をおおる

○
「麻の中のよもぎ」
れんげ田の赤蛙
桑の木の手取り虫
人間も

悪必ずしも悪ならず
善 絶対の善ならず
少なけりや礼儀
多けりや袖の下 ドル仕かけ エロ仕かけ
裏の裏あり
そんな世の中

○
恋愛は理想なり
結婚は現実なり

○
笑いを売る女
媚を賣う男
この商いにも課税され

○
親はせつせと麦を刈る
子は泥にまみれて土だんごを作っている
「いいお行だな今日は田圃の子かえ」
通りかかった老婆まで
フツ川柳語を使う

文字の話

福浦 勝晴

川柳塔社句会の柳話で若本多久志さんの文字にちなんだ話を興味深く拝聴しながら私は、この人の文字に対する敬虔な態度にいまさらの如く敬服させられた。——文字で思ひだすのは過日読売新聞の学芸欄かどこかで読

んだ里見弴氏のこと……。里見弴といえば「多情仏心」で有名な文壇の耆宿。その里見氏が老令の故もあるが戦後あまり目立った小説を書かない原因の一つに日本の漢字が制限されていることを挙げているが、文字に精通したこの老大家としては、まことにさもありなんと思われるのである。

いまからザッと三十年前の私たちがまだハタチ代のころに好んで読んだ谷崎や芥川の小説は、難解で未知の漢字やコトバをラッシュの如く文章の中にちりばめたクラシックなものだった。芥川が地獄変なんかその代表的なもので、随所に出てくる漢字を常に辞書と首つ引きで判読しながらも魅されたように耽読したものである。われわれの祖先が作ってくれた日本の文字は、一字一字に含蓄のある深い意味が蔵されている。この点、平調なローマ字をならべて一つの単語にしたあちらのものとかいふん趣きがちがう。当用漢字がよいとか悪いとかいう問題はしばらく措くとしても、私たちは立派な祖先が苦心慘怛して編みだしてくれたこの貴い漢字を決しておろそかにしてはいけないと思う。

私が川柳をはじめたのは、昭和二十三年、時局諷刺三行コントに取組んだのは二十六年で、多忙な本業に従事するかたわらいつも文字やコトバの世界を彷徨して来たが、誤字を誤字のままでも何年も書きっぱなししたり、無責任でふざけた造語を良い気になつて勝手にあそんで来たことには内心じくじとしてゐる。文字に対してはもっと慎重な態度をとら

なければいけないと私はさいきん特に深く反省させられている。

本社句会の三割打者

谷垣史好

若本多久志氏が、かつて柳話で本社句会に三割打者が果たしているか、どうかと云われた。

いつか調べてみたいと思ひながら、つい今日にいたつたが相当に手間のかかる仕事だった(四十六年一月から十二月までの句会入選句を資料にした)但し、三句以内のルールを尊重し公平を期した。公平といえは選者は一

一分間の柳論

「川柳は詩か非詩か」などと、いまごろいおうものなら、「何をとぼけてゐる」と叱りとばされそうな今日の柳界だが、果してこのままでいいものなのだろうか。

というのは、僕なんかも「俳詩」の同人時代、「川柳は文芸だ」なぞとのぼせあがつて、ことさらに川柳味を遠ざかった句を、盛んにつくつたものであるが、歳と共に「川柳とは人間淘汰の詩」。あるいは「

題損をするため、次回から選者吟も一点としたい。

ここでことわっておくが、量のみにとらわれることなく、ねがいはいはやり質にあること云うまでもない。

だいたい月六、七句入選すれば三割打者ということである。そして欠席すると三割はむずかしいということだ。そういう意味で三夫氏や花梢さんは三割を全出席で確保されたことになる。

①不二田一三夫(八十三回) ②藤岡花梢(七十二回) ③河内天笑(七十回) ④中島生々庵(六十八回) ⑤傍島静馬(六十六回) ⑥本多柳志(六十二回) ⑦垂井葵水(六十一回) ⑧菊沢小松園(五十三回) ⑨香川酔々(五十二回) ⑩西田柳宏子(五十回) 以下略。

天位入賞三回以上はつぎの人々である。

河村日満

川柳は人間である。「川柳は人情諷詠がすべて」といういわゆる三要素を中心とした川柳道に戻ってきた。

しかし、今日の川柳の中には「詩」だけが先行している句が随分と目につきだしたいつの時代でも開拓心は尊いし、実行してほしい。しかしそれはあくまでも大多数が理解し、ひきずってゆける道でなければならぬ。

④城一舟、香川酔々、正本水客。⑤河内天笑、中島生々庵、本多柳志、大坂形水、菊田いさむ、森中恵美子。

— 敬称略

夜桜のおもいで

吉田水車

もうあれは余程以前のことになる。灯ともし頃の京阪四条駅から市電の通りを東へ南座の前をずっと行くと右側の朱塗りの壁のひと構えが昔大石の遊んだ由緒の旗亭「一力」である。その辻を右へ入ると女紅場とか言った会館がある。そこで名物の「都をどり」が串だんごの飾り提灯も華やかに催されていてそこからまた一力の方へひきかえして電車道を右へまっすぐ八坂神社下に着く。境内を左へぬけて右へ進むと田山公園へ出る。と黒ずんだ松や樹木の間を通して妖しげに闇に浮き出た。当時は初代の夜桜の折からの夜露にしっかりととした姿が燃え尽きそうになってはまたパットさかんになる松明に映えて、まことに名画のようなのをいつまでも眺めあかすにいたものであった。

大阪へ帰る電車の中に気がついて、心惜しい別れを告げて、三条京阪のりばへ急いだ。電車と言えど今から見れば貨車よりもヒドいようなのに、さすがに疲れた身をゆだね

た。大阪天満橋に着いたのは、もう午前一時に近い頃でもあったろうか、その前のうどんなやにとび込んで空腹を満たして、もう市電も終わっていたので歩いて中之島のわが家へ帰った。

因に夜桜も今は二代で、それも、よく育って、春の宵を楽しませてくれているという。

たいまつへ桜散り込む豪華さよ 水車

たいまつへ松も桜も浮きあがり

夜桜の色に溶け込む東山

夜桜のすでに老朽よこたえて

ほんとうに夜桜惜しむ京訛り

句会で

児島与呂志

本社句会で、いつも厳選になるため、一三夫氏から「もう少し多くとるように」と云われるのだが、つい厳選になってしまふ。

私は自分の句が没になっても、その選者と合わないことだともい、あまり気を落とさないことにしている。光明寺時代よく全没が続いたが別に苦にならなかった。句会を手伝うことだけで結構たのしかったのである。

厳選にすぎず佳句を落とすより、寛選でそれを防ぐほうが選者としての道であることはよくわかる。だから私は私なりに精いっぱい努力しているつもりである。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 〇四 三四五一—四

夜間 〇四 四四〇八

選者が作者に気兼ねしてはいけなとおもう。これは当然のことである。作者は選者に文字を丁寧に書き、選者泣かせの文字はさけるべきで、私は選をするつもりで文字だけはハッキリ書くように心がけている。

句会をたのしくするために、よいことはドンドン自分から実行していきたいと思っています。

危険な川柳

木山要次

ある川柳子と柳論に花が咲いた話の中の一コマです。市内のあるそば屋は川柳子の行きつけのそば屋で寡婦の経営している店です。

諸君がそばを食いながら色々胸襟を開いて話合う場所でした。お女将さんの註文で何か川柳を一句作って欲しいと云う。勿論そのお女将さんは川柳は好きでも作ったことのない人でした。

川柳子は間もなく短冊に

人間が裸同士になるそば屋

と書いた早速店に掲げました。句の内容を客が云ったのか？ またはお女将さん自ら読む中に川柳の真隨に触れることができなかったのか？ 早速取り外して、今度は「私の句を作ってくれ」と云うので、川柳子はまた

女一人生き抜いて居るそば屋の灯

としたら今度は大いに気に入る自分の部屋に掲げているそうです。おそらくお女将さんは裸同士の中七をエロ川柳、或はエロにて客に当っている句と曲解したのでしょう。

作句の経験のない人には、この川柳のように解釈されることは大いに要警戒と思う。

これだから狂句時代のイメージをもって大衆から、ああ川柳か？ と一笑に付されるのではないだろうか。

大野寺に寄せて

藤田頂留子

奈良の室生寺や大野寺には私にとって忘れることのできないことがあります。亡父や亡

祖母に深い縁があるからです。

亡父は生前、室生寺の先住持荒木良仙大僧正のお弟子で藤田良英というお名もついていたが、昭和六年から十二年ごろまでお灸や加持祈禱を生業にしていました。

祖母は大正五年五月九日、室生寺へ大ぜいの方と参詣したとき、友人から借りた数珠を大野寺に忘れたのを盗んだうたがいをかけられました。その帰途、乗り物の中で祖母の持っていたコーモリ傘に大師様がその数珠をひっかけて祖母のあかしを立ててくださったという話があります。今の時代にそんなバカ

一分間の柳論

グループの指導者と称する者は口を酔っぱくして川柳層の拡大を呼びつづけている。ところがそれは結果として理想論という声だけの繰返しに過ぎないというのが現実である。こまめな手段と実行力が伴わないのである。これが何かのその一つである。一方作家一人ずつについても、と付き易さを乗り越えたと自信過剰の虜となつて、自分以外を考えない傾向となる。これも何かのその一つである。

指導者は理想論をふりまわし、運営は営業第一主義に走り、作家一人ずつは大将をねらおうとしている。これでは後に付いて行こうとすることが難かしいと云う前にす

気たということになります。これは事実で、祖母がその傘を拝んでいる写真に額にして、その中にその事情もちゃんと書かれ、今も室生寺の奥の院の御影堂正面右上にかかってあります。

昭和十五年以来、まだ室生寺へ参詣しておりませんので、数年前の玉造川柳会の吟行はゼヒ出席しなかったのですが、まことに残念でした。

その後、一人で大野寺へ行き、祖母の写真額をおおいで思わず泣いてしまいました。

水粉千翁

がり付くものがないではないか。

「互選の推進」は兎も角として、「グループの多党化」を強調しつづけて来た私は、川柳発表は「炬燵を囲んで」三々伍々探究するグループが続々生まれるところから緒口を掴むべきであると極論したい。勿論それには一人ずつが自覚してその場を作る事が第一条件である。そこには大将のいない裸の柳論をぶつけ合えるからである。

大将になろうとする売名の人間の弱点こそ川柳発展のブレーキであり、しかも現実に相当錆び付いたブレーキであるといいたい。

川柳五十三次 (十九)

富士野鞍馬

39 池鯉鮒

池鯉鮒(ちりふ)は知立とも書かれ、岡崎から三里二十丁(一五キロ)である。

鳥丸光広の狂歌に、

此里の名におひたりとお肴の

料理をしたる池の鯉鮒

とあるように、昔この地の知立神社の池には、多くの鯉鮒が飼養してあったので「池鯉鮒」と書かれたということである。

また知立神社の祭礼には、いつも喧嘩があったと伝えられ、

大喧嘩池の鯉鮒ふみちらし 玉章(四三九)
池の鯉鮒のあたりで金魚見え

などと、池鯉鮒の文字にこじつけた狂句もある

る。

知立から東一キロばかり街道の北に当たて、八橋山無量寿寺があり、そこに阿呆親王とその子在原業平との木像が安置されている。この辺は、昔燕子花の名所として知られた、八ツ橋で、在原業平が東下りの際、ここで「かきつばた」の五文字を折り込んで、からころもきつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふという一首を詠んだので、一層名高くなった旧跡である。

中將の道ぐさに折るかきつばた

業平も骨を折句のかきつばた 如雀(二二四)

東へ下る道草はかきつばた 赤子(二四〇七)

菅子(八〇二三)

葭乃先生の

某月某日

——三夫宛の書信から——

前略——いつも目のまわる程のお忙しさであらうとお察します。私は相変らず蟄居生活をつづけていますので、世間さまには何のお役にもたため毎日にてまことにすまないと思っています。

川柳塔の皆さま、御元気に作句を暮らしの中にとり入れていられますのを拝見して何よりもうれしく存じています。

★

前略——このごろは、ちょっとしたことにもくたびれます。

くたびれたら直ぐ寝ることにしております。街を歩いていても、毛のむしれた野犬や、ちんばの犬にあいますと、彼らもまた私達の同類だと淋しくなります。

足の運びがスローになりました。これは齢のせい、いたし方ありませんが、膝の屈折などは、なるべく不精をせずに立ったり坐ったり中腰でものをする回数をげしくしています。

かきつばた四字と六字の上に置き

(二四三)

杜若いたづら者がおっべしより

芋蔬(四二二)

なるほどと指を折らせる杜若

和文(五九二)

旅日記八日目につくかきつばた

(二五二)

など、この外にも多くの柳句が詠まれていた。江戸から三二キロ、八日目に着くのであった。

この地では、毎年四月二十五日から五月五日まで、盛んな馬市があったので、広重もそれを描いている。

40 鳴海

鳴海(なるみ)は、昔海ぞいの町で「東海道名所図会」にも海が描いてある。しかし現実の鳴海はずっと海から離れていて、池鯉鮒から二里三十丁(一一・一キロ)。江戸時代往来頻繁な頃には、本陣、脇本陣、旅籠六十八、人口三千六百余という、かなりの宿駅で、ここから尾張である。「膝栗毛」に

「それよりあなふ村、落合村をすぎゆきて、有松にいたり見れば、名にしおふ紋の

名物、いろいろの染地家ごとにつるし、かざりたてあきなふ。

ほしいもの有まつ染よ人の身の

あぶらしぼりし金にかへても」

とあるように、鳴海へ入る前に有松があり、絞り染の名産地として聞かえている。鳴海にも絞り染を産し、鳴海絞といひ有松絞という。それで「膝栗毛」にまた狂歌あり、

旅人のいそげば汗に鳴海がた

こしもしほりの名物なれば

と詠まれ、川柳も

鳴海で汗をしぼる早飛脚

浜人(二四三二)

白木にもあるとなるみでけちを付け

(明八智四)

しほり程鳴海の沖にいわし雲

風松(二〇八五)

朝顔も鳴海絞りの見世を出し

(拾初二)

と詠んでいる。白木は江戸の白木屋呉服店。

唯七も冷汗しほる鳴海宿

金成(九五三)

赤穂義士の武林唯七が、この宿で災難に遭ったという話である。

広重の絵もこの絞りの見世が描かれてある。

おたよりもこんなうつつとうしいことを云うようになりました。

★

前略—つい二三年前までは毎朝冷水で顔や頸を洗っていましたのに、このごろは水の冷たさがわかるようになりました。若い者たちがストーブなしの部屋では暮らせないので私はストーブなんか要りません。坐布団をひくこともどうかすると忘れるのです。何も彼もが無感覚に生まれついているので私は幸福だったかも知れません。

★

前略—川柳塔三月号ありがとうございました。今日はこれから七日の日の命日をおかねて万代へ行くつもりです。本年は元日そうそうからの寝正月で、いがんでましたので今日の万代行きは本年にはいつてから初めての訪問でございます。

生駒、大阪間の往復がちょっと苦労になってきました。駅々の階段の数に辟易しています。

あなた様も無理をなさらぬようにお願いします。と云っても編集者は縁の下力持ちと無理をせねばならないように運命づけられています……。—後略。

春は大萬川柳大会から

会場 大萬
昭和47・2・27

ことしも、やっぱり「春は大萬川柳大会」とタイトルは変わらない。実感がそう書かせようである。

選者第二位の米子の八木千代さんと十一時に天王寺駅改札口で待ち合わせることになっていた。葉子さんと二人で出迎える。

三人はミナミの虹のまちへ。

「まあ、キレイ」とか「よかった」とか、とくに噴水の虹には手を合わす千代さんである。右と左の美女が会場入りを急ぐため、一時すぎ「大萬」の出席名簿へ署名する。

会場内はすでにぎっしりだ。司会西尾栗、開会の辞若本多久志、挨拶川村好郎、柳話中島生々庵諸氏は例によって例のごとく、これも変わらない。

司会栗副主幹のユーモアたっぷり。開会の辞の多久志副理事長は女性軍進出を大歓迎。挨拶の好郎副理事長は健康を守って大萬川柳発展に全力投球をする」と謝辞。

生々庵主幹は幸福をテーマに、故梅里氏の六十年は幸福だったと、信仰家主幹らしい柳話だった。

遠来柳人の紹介。倉敷の恵二朗、梁水両選者、八笑人氏。岡山の朝二氏。米子の千代選者諸氏によるこそと八方から拍手がひびく。番傘の萬葉氏も久しぶりのご出席である。路郎選時代には選者として出席されたこともあった。

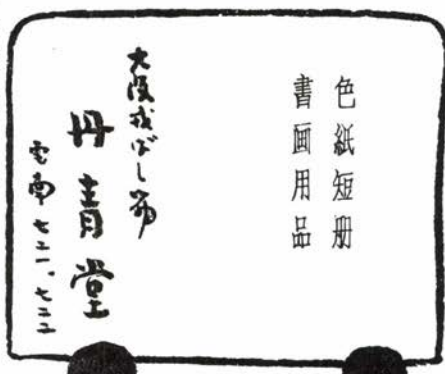
大萬川柳史にページを加えると、上位四選者はみな女流作家ということである。選者室に花梢、千代、弥生三選者が一角を占め、女三人寄ればカシマシイが、これはまた必死？の選句に重い沈黙がつづく。

披露になると、
「千代デス」「千代デス」と、この「デス」が千代さんのパテントだが、
「素郎デス」

「菜デス」と特許侵害者続出。
「千代デス」と本家のきれいな声が出ると会場はドットとく。ここにも川柳塔家族のなごやかさがあがる。

第一位の藤岡花梢さんが昨年度の梅里賞。十一位の藤井一二三氏は三年連続敢闘賞という新記録を作り、それぞれ賞品と生々庵主幹

色紙短冊
書画用品



の短冊が一年間の苦吟のあとを物語る。

席題「筆まめ」

松下 梁水

駅の隅ベン走らせる旅便り
筆まめな金釘流が型になり

柳宏子
太茂津

筆まめな友には故郷に母があり
筆まめな友には故郷に母があり

多久志
選者吟

席題「せっかち」

本田恵二朗選

箸割ってせっかち貧乏ゆすりする
せっかちが直ったと思えば物忘れ

新之助
百酒

せっかちなひととそなたんびに思う
兼題「追加」

河内 天笑
選

自衛手段か空ろ咳を一つ足す
落書の横に落書きしたくなり

水客
吸江
萬楽

兼題「濡れ衣」

宮西 弥生 選

梅の香の濡れ衣ならば着てみよか
濡れ衣を身に着せられてからの鬼

素 郎
酔 々

濡れ衣が乾きブランコ歌い出し
ぬれ衣を着るとは他人知らず

八笑人
選者吟

兼題「旅帰」

正本 水客 選

もう行かぬ行かぬと母の旅がえり
庭すこし荒れたなと見る旅帰り

朝 二
千 代

旅帰りのなれた匂いにとする
旅疲れ僕の布団がある茶の間

雄 峯
選者吟

兼題「雑談」

八木 千代 選

爪切っていて雑談にはいらぬ
雑談になればドモラぬ目が光り

水 客
新之助



左から 花梢・弥生・千代のみなさん

雑談の中でルールは守り抜く
とりどりの話題へ父も炭をつぎ

智 子
選者吟

兼題「縁」

藤岡 花梢 選

浅からぬえにしとなった旅の女
そのえにし断つ実印が冷えている

誓 二
里 風

縁遠い女にさせた過去の恋
それぞれにえにしという鎖り

選者吟

閉会の辞は小松園氏。これも極わめ付けに
なっている。 — 三才と軸吟 —

第二部「ベストテン招待宴」となって司会
は柳宏子氏と代わる。

いわゆる好郎門下の面々が、きょうも大挙
応援にかけつけ、下足から受けつけなどに大
わらわ。この人たちと共に酒座を囲む。

生々庵主幹の乾杯の発声に、盃がグラスが
入れ乱れ、川柳塔演技陣の幕あきである。

酔々、素郎、鬼遊、百酒、慶之助、史好、
一二三諸氏が渋いノドや小ばなしを披露すれ
ば、千代、弥生、葉子さんたちのパートナリ
となって形水、好郎氏らのダンスだ。これら
の伴奏には天笑氏がギター片手にかつてのブ
ロの腕前を聞かせる。

花梢さんの「隠れ芸」や、柳宏子さんの奇
術、梅志さん以来の謡いを形水氏。薫風氏の
雨の御堂筋も好調。

生々庵主幹の都々逸、水客氏のご存じ声
色、恵二朗氏のこれはまた天性の話術に佐渡
おけさというサービス。

さて、今夜の庄巻は、倉敷の松下梁水氏の



左から 水客・恵二朗氏

名調である。聞けば尺八の名手でもあるそう
な。大萬川柳大会へ出席すれば、どうでも隠
し芸をさせるため、出席をしないという八笑
人氏と朝二氏に、「オレが代わりにやってや
るサ」と、自信のほどがうかがわれたこと
である。

松江克己氏が亡父（梅里氏）そっくりの美
声で満場をシーンとさせれば、お待ちかね柳
宏子氏の「どじょうすくい」だ。唄は梁水氏
の正調に天笑氏のギターをたたいての伴奏。
満場も手拍子でこれに応じグンと盛り上がっ
たことで、さっと閉会という手なれた演出で
ある。

柴副主幹の音頭で万才三唱、もう一つおま
けの三唱がとび出すにぎやかさ。ここにめで
たく散会となる。

(F) (フォート・新之助)

▼有志によるご寄贈や松江家からのおみやげ
など誌上で厚くお礼申しあげます。 — 好 郎

新人

河井庸佑選

売り込みのコツも新人もう覚え
新人が来てから空気が動き出し
新人のいつか追い越す日を信じ
新人のスターやたらと脱ぎたがり
虹に似て新人はかなく消えてゆき
来賓の祝辞を新人メモをする
新人の価値背番号で占われ
ぶつかった壁に新人うろたえる
新人に期待の重い金メダル
新人のまず飲めることから認め
コネのある新人強気なところ見せ
新人へ打たれてこいと言ふベンチ
賞とってから新人は出なくなり
昇る日に似て新人のさわやかさ
現実の風新人を容赦せず
新人の当座は課長になる気合
新人の過去賑やかに週刊誌
新人として定年の職さがし
新人を育てて他社に引き抜かれ
新人の決意を見せて眉太く
新人へもうとやかくのスキヤンダル

テクニクまだ新人を寄せ付けず
大物になりそうあがっていぬ新人
新人のエリート女影になり
新人の瞳希望に燃えに燃え
新人の夢現実につき当り
新人に古い社則が気に入らず
自縄自縛新人としての壁
新人の毛並とやかく噂され
新人が僕のプランに逆からわず
定年がきて新人に舞い戻り
新人のジギルハイドに気が疲れ
新人にいばらの道も待っている
新人の勘が当たった社の内部
新人の出没水泡に似て哀れ
新人へ負けては居れぬ四股を踏み
再就職又新人の顔になり
新人へ右派と左派から誘いの手
新人に慰められてる落日
ライバルの目で新人を迎えられ
新人のセンス輝く飾り窓
新人の意欲にスタッフ叩かれる
「初心不可忘」をそろ忘れたる
新人の嘴んで含める口が過ぎ
怖いこと知らず新人かきまわし
新人と言う未知数を票に賭け
新人と騒がれていて孤独性
人

先走る人へ新人落ち付けず
新人の覇気が社長に突き当り
ハイミスの眼に新人うろたえる
軸
天
地
一 郎
章 雅
初 甫
七 面 山
曉 風
要 次
凡 九 郎
三 十 四
季 賛
素 身 郎
静 歩
貞 男
木 魚
綾 女
ど ん たく
重 人
曉 明
梁 水
葵 水
肖 二
新 之 助
古 方
昌 道
白 汀
止 水
新 人 へ 負 け て は 居 れ ぬ 四 股 を 踏 み
再 就 職 又 新 人 の 顔 に な り
新 人 へ 右 派 と 左 派 か ら 誘 い の 手
新 人 に 慰 め ら れ て 居 る 落 日
ライ バ ル の 目 で 新 人 が 迎 え ら れ
新 人 の セ ン ス 輝 く 飾 り 窓
新 人 の 意 欲 に ス タ ッ フ 叩 か れ る
「 初 心 不 可 忘 」 を そ ろ 忘 れ た る
新 人 の 嘴 ン で 含 め る 口 が 過 ぎ
怖 い こ と 知 ら ず 新 人 か き ま わ し
新 人 と 言 う 未 知 数 を 票 に 賭 け
新 人 と 騒 が れ て い て 孤 独 性
人
先 走 る 人 気 へ 新 人 落 ち 付 け ず
新 人 の 覇 気 が 社 長 に 突 き 当 り
ハ イ ミ ス の 眼 に 新 人 う ろ た え る
軸
天
地
一 郎
章 雅
初 甫
七 面 山
曉 風
要 次
凡 九 郎
三 十 四
季 賛
素 身 郎
静 歩
貞 男
木 魚
綾 女
ど ん たく
重 人
曉 明
梁 水
葵 水
肖 二
新 之 助
古 方
昌 道
白 汀
止 水
バ ー ゲ ン で 仕 入 れ を 急 ぐ 資 金 ぐ り
開 店 の 花 輪 に 匂 う ス ポ ン サ ー
シ ャ ッ タ ー を 今日 も 締 め る 資 金
地 な ら し の ま ま で 放 つ と 資 金 難
落 選 を 資 金 不 足 の せ い に す る
資 金 源 を 突 け ば 汚 職 の 匂 い が し
資 金 い っ ぱ い 動 か ず 肚 が き ま ら ぬ
資 金 カ ン パ 十 円 玉 の 音 が す る
資 金 援 助 仰 い で か ら の 奴 隷 で す
資 金 め ど つ い た ビ ール を 妻 も 飲 み
資 金 繰 り 妻 は 実 家 を 泣 き 落 と し
赤 軍 派 資 金 何 処 か ら 出 る の や ら
結 婚 資 金 ど つ さ り 貯 め て ま だ ひ も
資 金 ぐ り 若 い 社 長 の 試 金 石
オ ー プ ン も せ ず に 資 金 は ピ ン チ
代 仕 男
宵 明
里 風
初 甫
本 蔭 棒
七 面 山
古 方
カ ズ エ
素 身 郎
思 月
春 日
貞 男
久 司
久 亭
木 魚

西尾青一路選

資 金

絵ハガキ

石倉旅風選

海外へ行ける資金は親の金
知床の資金稼いでいるバイト
集議一決資金になって行き詰り
匿名で届く資金に励まされ
資金から言えば女房が社長なり
青写真はめて出資は断わられ
恩を知る資金は三代目にかえし
再建の資金へ檀家狩り出され
二あ人で恋を貫ぬく資金積み
資金ぐりねてもさめても空まわり
資金繰りに利用されてた有名人
資金より度胸ですよと今日の地位
小じんまりと手持資金の青写真
手にあればたたきつたい金も借り

友情の資金再起の灯をともし
プラモデル買う末っ子の資金ぐり
資金源ばかす女将の片えくぼ
スナックを持つ夢ホステスも稼ぎ
ゲバ棒を振るに学資は送ってず

店閉じて資金の要らぬ手弁当
トルコ嬢組の資金を稼がされ
教え子の資金で遺稿集を出し
高飛の資金づくりはおそろしい

豊人 重人 悠泉 輝親 梁水 珠笑 柳子 保夫 与根一 トク子 綾女 秀峰 牧人 和宏 扇水 里風 杜月 どんたく 牧人

絵ハガキにもなり煎餅にも焼かれ
絵ハガキと違うとガイド責められ
大型にして絵ハガキの値を上げる
絵ハガキは公書都市と思われず
絵ハガキに無い鳥の声聞く旅路
絵ハガキに旅のプランを書き加え
絵ハガキでないと見られぬ雪景色
絵ハガキの一銭五厘なつかしみ
絵ハガキにならぬ故郷の志摩を恋い
絵ハガキへ文字もはずんだ子のため
絵ハガキの景色を脊に撮るカメラ
絵ハガキに依れば居た筈夫婦鶴
絵ハガキの型にはまった風景画
カメラ持つ客で絵ハガキ目もくず
記念切手孫が絵ハガキからはがし
絵ハガキに託しまだ見ぬ人思う
絵ハガキの文字に死ぬ気はないと知り
絵ハガキの隅にひとこと妻も書き
絵ハガキに宛先だけの子の便り
名利は絵ハガキ買うてすましとき
絵ハガキの中で廃屋美しい

隆子 一人 伶人 和宏 杜月 季賛 保夫 古心 鎮也 佳女 悠泉 柳子 純滋 軒太楼 まさひろ トク子 梁水 木魚 珠笑 信二 バット

洋行の夢絵ハガキの瀑に立ち
絵ハガキの順にわったハネムーン
絵ハガキと同じ景色を撮ってくる
初恋の人の絵ハガキすて切れず
絵ハガキの中ではキレイな滝の音
絵ハガキに倅せですと幼な妻
絵ハガキの緑が指に染まりそう
でかくしたらと絵ハガキ大砂丘
絵ハガキを出さずポストが見付かず
寄せ書の絵ハガキがまく笑い声
絵ハガキにない裏町にある旅情
先生へいい絵ハガキを選んで買い
志功かく版画の年賀額になり
絵ハガキで妬かせてやろう恋敵

御無沙汰の詫び絵ハガキへ書いと来
絵ハガキの切手も配る名幹事
絵ハガキが着て留守宅ホットする
寄せ書の旅の絵ハガキ酔うて居り
船員の妻絵ハガキを抱いて寝る
拝啓のない絵ハガキで親しまれ
絵ハガキの仁王はあばたも撮られ
絵ハガキを残し万博消えました
絵ハガキに釈白柳が生きて居る

久司 素身郎 翁童 七面山 思月 カズエ 古方 松花 潮音 静泉 恵子 貞男 利美 国彦 葵水 松花 初甫 酉合 千翁 重人 輝親

初歩教室

— 題「好」 —

本田 恵二朗

もの好きを何かの欲でこき使い

下手な横好きで釣りにこり

進

説明をしただけの句である。故路郎先生の言われる『そうですか川柳』である。この句の下に、そうですかと附けたら、それでお終いということである。そこで表現に一と苦勞せねばならぬことになる。表現を考える時に、必ず念頭に置かねばならぬことは、句のリズムである。音読を繰り返してみると、それが一番よく判る。リズムカルに音読できる句でなくてはならない。一句生んだら、必ず音読してみを癖をつけて欲しいと思う。

(もの好きを踊らせている儲けてる)
(下手の横好き魚籠にこり竿にこり)
こう変えてみると川柳的になったと思う。またこの二句を音読してみると、リズムカルになったと思うが、一つ音読してみて欲しい。父ちゃん好きといつては小遣せられる

静泉

はなかった。十七音字にまとめる努力が肝要
(父ちゃん、九・八の句となった。五七五に
こうすると、九・八の句となった。五七五に
せねばならぬと決まなくてよい。この句を音
読すると「父ちゃんは好きよ」とを一呼吸で
読んで「ふところをねらう」と続けなければ
なるまい。五七五に音読すると奇妙になるよ
好物と聞いて芸者も味を見る
これでは味もそつけない。もつと味のある
句を生むための苦心をせねばならぬ。
(好物で釣る気の芸妓に釣られてる)
曆より無風好天種を蒔く
言わんとする意味はわかるが固苦しいよ。
(花の種蒔けと好天に囁かれ)
軽いつつちの句は、気もちよく味わるるよ。
好きよにせいと同意した頑固
(好きなようにしなと頑固な城が陥ち)
好きすきと書いては消した便箋紙 西合
(好きすきと書いては消した恋ごころ)
宿六は仕事は嫌い酒は好き
(宿六の仕事嫌いで酒好きで)
行過ぎの好意へ警戒しはじめる 保夫
オーバーな好意へ女身構える)
好きな人あるかと縁談切り出され 露芳
もうあるのと仲人好きが打診する)
好調の持続へ心身すりへらし 軒太楼
(好調を支え続ける肩がこり)
好々爺にウカと油断しだまされる
好々爺と見たのが不覚だまされる) まさまろ
口だけは横好き負けぬ将棋面 頂留子

(横好きの口では負けぬ将棋盤)
(将棋盤横好同士がいきりたち)
(お人好ただそれだけで今の世は 千夏
お人好し浮世のきびしき見そこない)
悪口も言います好きな人だから 茂美
(好きだからこそその喧嘩の楽しそう)
艶めて娘は好きな人が出来 好一
(好きな人出来たかめつきり艶を増し)
好感を持ちつつ持たれつ良き見合い 豊生
(好感を持ちつつ持たれつ見合の座)
日日好日も仲夫婦の情にて 陽山
(日日好日仲も嫁もあたたかく)
恋人は男の好きなものを知り 隼人
(好きなもの知りつくし合い恋進む)
好ましき新社員の初出社 秀村
(新入社ハイハイハイと好ましい)
好男子きざゆえ女は寄りつかず 賛平
(好男子すぎて警戒されている)
頑固おやじ年輪重ね好々爺 同
(年輪で頑固を消して好かれそめ)
お好み焼の匂いキゅッと腹の虫が鳴く ますゑ
(腹の虫お好み焼へ目を寛し)
友達と逢えば乗り越す話好き 満津子
(話好き同士が一と駅乗り越し)
お好みが全てわかるも三年目 潔
(お好みかわかってしまった三年目)
其処で腹立てたで好意無駄になり 比呂路
(トゲのある一言で好意水の泡)
話好き頼まれごとを皆忘れ 同
(話好きたのまれごとを置き忘れ)

衿あしの好もしと映ゆ薫る風
(みどり風好きなあの娘の衿をなで)

貞祐

横好きの下手な年が縦となり

頼次

商売繁盛好きで始めたでもないに

止水

絶好のチャンスへ首を出す理性

本藤

好き同士ならばと叔父が助け舟

利美

金婚の父母いつまでも好一對

誓二

この分じや好々爺にはほど遠し

杜月

鎌首をふともち上げた好奇心

同慶

たれにでも好かれる妻の低い鼻

慶彦

けんそんなような顔で、まんまとのろけて

翁童

ござる。面白い句だよ。

同秋

好物を土産に裏のあるそぶり

同秋

婦省子の好物あれも焚きこれも煮る

同秋

好評へ蔭の力で泣いてくれ

同秋

雅号ぶっちゃけばなし (92)

きすい



垂井 葵水

たるい

TV「男は度胸」で葵の紋が脚光を浴びたが、勿論徳川家とは何の縁りもない。どなたでも一応迷って下さるので印象づけるが決して奇を做った訳ではない。私の曾祖父が其水、祖父が逸水、父は甫水と号していたので、昭和一四年頃京都遊学中俳句の鈴鹿野風呂先生に命名して戴いた。兵役中を除いて連綿(?)俳句ひと筋の私に故清水白柳先生が「川柳」という二号さんを持たせて下さった。その時柳号を別にすればよかったのだが、まさかこんなに「川柳」娘が可愛いくなり、深間にはまり込もうとは思っても見なかったのである。ローマ字綴りにするとKISSに通じているのがせめてもの洒落っ氣と自負している。

垂井合名代表、俳誌「運河」同人 五十歳

川柳塔社常任理事会

三月四日の理事会は主幹が心齋橋ロータリークラブへ会長として出席のため、多久志、栗岡氏中心に会議をすすめる。同人諸氏とより親睦をはかるため、地方訪問の場合ではできるだけ数談の機会を得るため、同人諸氏の電話連絡などを本社へ知らせいただくことなど、川柳塔一家族のねがいがここにもこめられている。

本曾路方面の旅行など栗氏から発言があった。六月十七・十八日に決行案など。

出席 若本多久志、河井庸伯、大坂形水、西尾栞、本多柳志、橘高薫風、菊沢小松園、不二田一三夫諸氏。

一七時半閉会



プロラス

高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部 TEL (33) 9974
レストラン TEL (21) 2334

大 萬 川 柳

「二の足」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 七百五十五句
 入選 七十三句

二の足で儲け逃がした日の株価 堺 一二三
 二の足を踏む貧しさに欠いた義理 島根 潮音
 二の足へ女の意地は石となる 大阪 小松園
 二の足へ自動ドアは素直なり 大阪 葉子
 二の足の商談よそへもってかれ 大阪 形水
 二の足へ仲人の足くたびれる 笠岡 遠二
 良縁に二の足を踏む恋ごころ 香川 酔夢
 二の足の重さ集める曲り角 羽曳野 可動
 スードモデル一度は二の足ふみ 松江 鶴丸
 二の足へ女待ちきれないノック 兵庫 可住
 人生の賭け二の足へ味方せず 大阪 文秋

策戦と見た二の足の裏をかき 富田林 弥栄子
 二の足を踏んだ任地の温かさ 島根 芳子
 二の足を親が踏んでいる入試 岡山 止水
 二の足を踏めば妹へプロポーズ 富田林 花梢
 二の足をふんだデートに待たれる 倉敷 翁童
 二の足になって積木の愛育て 東大阪 弥生
 二の足を踏むほど既に借りており 橋本 木魚
 長男の立場二の足ばかり踏み 大阪 比呂路
 仲人のお世辞二の足踏まされる 岡山 白水
 二の足の友に虎の子握らせる 倉敷 克枝
 慎重な二の足恋が動き出す

笠岡 忠三 二の足を踵をかえず自尊心 和歌山 葵水
 二の足を踏ます噂が多すぎる 大阪 水客
 兄さんと呼んで二の足ふんでいる 愛媛 悠泉
 弁護士も二の足六法全書繰る 吳 英詩
 二の足に提灯持ちを買ってやり 松江 通児
 二の足を踏んだわりと貸してくれ 大阪 弘生
 二の足をふんだ質屋も通い馴れ 堺 天笑
 駆け引きという二の足になつても 大阪 雄峯
 ちゅうちよする心と別にもあせり 神戸 どんたく
 プレゼント二の足踏んだゼロの数 大阪 新之助
 謙譲の美德に二の足されつつまい 宿毛 窓花
 二の足へ輪をかけている片思い 西宮 百酒
 再職へ二の足踏ます面子もち 倉敷 千翁
 二の足を踏ます鎖が重たすぎ 岡山 久米雄
 二の足を踏めば茶柱立つてくれ 尼崎 紫香

二の足をどつかの犬が吠えるなり 八尾 酔々
 過去になお生きて二の足踏む女 松江 与根一
 二の足をふんだ見合いで一目惚れ 八尾 悦郎
 二の足を別に持つてるエチケット 大阪 真砂
 二の足に追いつちかける冷い眸 宝塚 静馬
 プロポーズ二の足を踏む門構え 倉敷 梁水
 二の足を踏んでた祝儀にケチを 藤井寺 吸江
 二の足を踏ませぬ愛にある重味 二の足のよりで値切るコツも知り 神戸 牧人
 捨てに行く犬へ二の足踏むぬくみ 結納もすまし二の足踏む噂 倉敷 恵二朗
 釣書が良過ぎ二の足三の足 顔ぶれの豪華へ出欠決めかねる 郡山 カヅエ
 二の足を踏む気にさせぬ口達者 二の足へおみくじまでが凶と出る 大阪 あいき
 縁談へ二の足ふむのはいつも母 愛の突進母の二の足飛び越えて

尼崎 徹也

二の足を踏む余裕すらなき窮地
二の足をふんでるらしい赤電話

倉敷 素身郎

ここまできいながら二の足踏む女

二の足を踏んだ会社で今課長

二の足を踏み良縁だったかも知れず

大阪 一栄

二の足は財布に相談してるなり

二の足へ横から手が出る特売場

二の足を踏んで帰った柄を恋い

佳句

守口 笑風

二の足も脈セールスつきまとい

大田 軒太楼

振り出しの甘さ二の足ふむ誤算

笠岡 忠三

一割を引くと二の足見すかされ

富田林 美代

愛憎の岐路二の足がまだ残り

羽曳野 吐来

二の足を踏んだと互に笑う縁
人ノ句

二の足で来たあわれに貸してやり
地ノ句

二の足のまま家裁へ来てしまひ
天ノ句

二の足の歩巾ではたす小さい義理
選句吟

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

二の足の妻連れ出した春日和
昭和四十七年度

八 重人

九 あいき

一〇 カツエ

一一 一栄

一二 比呂路

一三 智子

一四 文子

一五 通児

一六 軒太楼

一七 克枝

一八 惠二朗

一九 惠二朗

二〇 惠二朗

二一 惠二朗

二二 惠二朗

二三 惠二朗

二四 惠二朗

二五 惠二朗

二六 惠二朗

二七 惠二朗

二八 惠二朗

二九 惠二朗

三〇 惠二朗

三一 惠二朗

三二 惠二朗

三三 惠二朗

三四 惠二朗

三五 惠二朗

三六 惠二朗

三七 惠二朗

三八 惠二朗

三九 惠二朗

五〇 大阪

四〇 大阪

四〇 郡山

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

四〇 大阪

大阪市南区鰻谷仲之町二〇
川柳塔社内 大萬川柳係

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック

積水化学
本社 大阪市北区宗道町一

み



川柳連作

ソクラテス

光武 弦太朗

また始まったテス爺さんの辻講義

気違い爺に寄るな触るなアテネの町

ソクラテス稼ぎもなくて口ばかり

家にあれば尻にしかれてソクラテス

借り猫に似てソクラテス妻の前

妻の愚痴哲人ぐいとワイン乾す

ソクラテスひげにちよっぴりワインの香

恐妻のそのみなもととはソクラテス

毒杯をのみソクラテス名を残し

ひと粒の麦ソクラテス弟子数多

長崎県佐賀郡蒲戸一帯地

川柳ふあうすと社同人・千八二一五

☆ 柳 界 展 望 ☆



山陽新幹線試乗の北川春雄氏

橋 高 薫 風 担当

▼北川春雄副主幹は看護学院の院長をしておられるが二月初旬の入試、中旬の助産婦学校(校長もされている)の入試、またはこれらの合格発表などで新幹線の試乗が延びていたが、二月二十六日に季替氏と共に運転台に乗り岡山へ。浜田久米雄氏(岡山同人)は逆コースで新大阪まで試乗された由。来た証拠桃太郎さんの顔を借り「春果」

日十二時から、本社から西尾榮副主幹は「男と女」の選者として出席される。▼番傘折鶴川柳会二十周年記念に金泉万葉句集「北はま」を発刊。この書評は菊沢小松園氏が次号に執筆。▼山陰観桜川柳大会は四月十六日島根県木次町ユースホテルで開催。大阪から十数人参加の予定。▼弘津柳慶氏(岩国市同人)は四月一日付で山口県岩国出張所へ栄転。▼七四一、山口県岩国市錦見三丁目五

番五二号、日本専売公社岩国出張所へ。▼堀口塊人氏(西宮市)の病氣療養のため、川柳文学社は、大阪北区真砂町三真砂ビル内永田事務所へ移転した。▼「路」第二回誌上全国川柳大会は、同誌の百号を記念して開催された。▼尼崎川柳大会は昭和四十七年三月十二日(日)正午から尼崎市中心公民館で開催。▼第十二回伍健まつり川柳大会は二月十三日(日)午前十時から松山市の愛媛県PTA会館ホールで開催。▼北海道川柳大会は昭和四十七年七月二日(日)午前十一時から滝川市役所大会議室で開催、兼題は、限外・対照・記憶・中心・薄倖・席題三題、特別参加作品一雑誌二句、投句料三百円(発表誌希望は更に百円)投句締切りは四月三十日、投句先は滝川市栄町一八三、滝川川柳社。

▼ナンパーワン選出誌上句会優勝戦の(時の川柳社主催)ナンパーワン賞は京都市の山本ひよこ氏が特選は渡辺銀雨、藤沢三春、浜崎貴代坊、山本ひよこの諸氏が受賞された。本社の中島生々庵主幹も選考委員の一人として選を担当された。垂井葵水氏(和歌山同人)の二句が秀吟に推された。▼昭和四十六年度の備前川柳社賞は兼光浄美氏に準賞は武元柳子、杉原胡風両氏に決定、備前川柳社川柳後楽吟社合同の新春句会に授与された。▼第二十四回高知市文化祭「文芸展」が五月二十日(土)から、二十八日(日)まで県立郷土文化会館三号室で開催される。詩・短歌・俳句・川柳・民謡・随筆・小説と文芸一般に亘る劃期的なもの。

▼川柳あしなみ会(国鉄姫路)の満十五周年を記念して、十五年間の句を一冊にまとめ、参加者全員に無料配布されることになった。▼川柳やまぐち百四十号は第二十回山口県川柳大会記念特集として一月十日発行される。▼川柳白百合第八十八号は第六回岡山県川柳大会特集号。▼川柳塔「まつえ」誌は新春号から「川柳塔巻頭句を斬る」柳人訪問記など劃企的な試みを掲載されることになった。松江市在住の同人の座談会形式である前者は第一回を同県人の藤井明朗氏の句を組上にされた。自己研鑽の資とされる意味もあるとのこと。

A-03

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆5ミリ錠・25ミリ錠があります
☆食後すぐのものが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬店で


タケダ

▼水谷竹莊氏（大阪同人）

は二月十三日、東京築地の

（治作）で開催された富士

野鞍馬氏の喜寿祝賀会に出

席、石曾根民郎、石原青竜

力、片山雲雀、その他柳界

有名人多数と歓談、散会

でこれが雪国人の心理でし

ようか

後、鞍馬居で久良伎翁句碑

の話など古い話を伺い歓待

にあずかったと。

▼大江秋月氏（兵庫同人）

は二月十日付発令で、英賀

保駅長に任命され十四日か

ら赴任された。姫路市のす

ぐ下関寄りの駅で全国難読

駅名の一つ、アガホと読む

▼奥谷弘朗氏（倉吉同人）

は新春から新居の建築に着

手されているので川柳が作

れなくなる程を使い、完

成の四月には長い官舎生活

ともおさらばですと。

▼小砂白汀氏（島根同人）

から「暖冬でも雪などな

いだろうと思っていたら三

月に入るや猛烈な降雪で、

やっと人心地がついたよう

でこれが雪国人の心理でし

ようか

▼三井敏夢さん（香川県同

人）は随筆グループ発行の

「無帽」第百号に「子はか

すがい」を執筆された。

▼こだいら通信第一号が昭

和四十七年二月二十五日東

京都小平市たかの台一四一

四、奥津路一朗方川柳誌史

刊行会から発行になった。

先ずは川柳誌史礎稿として

四十数例の柳誌・句報が簡

単に紹介されている。

▼横田英詩氏の本社同人推

新 同 人 紹 介

横 田 英 詩

— 甍光・静水・小松園推薦 —

本 田 八 笑 人

— 三林坊・栞・好郎推薦 —

薦を祝い竹原川柳会では句

会を開催、呉から林野甍光

同人も出席された。

▼第八回大津川柳作家同窓

会は本年九月二十三、四日

（連休日・祭日）山陰・

三朝温泉、鳥取砂丘。二十

三日十六時に三朝温泉「は

くろう清流荘」で集合。詳

了だが、その令息小谷良太

朗氏が（東洋紡績主任研究

員）このほど農学博士の学

位を得られた。

▼堀江芳子さん（島根県）

の歳父が八十二歳の高齢で

二月二十日逝去。謹悼。

▼堺・若芽合同句会—四月

十三日午後六時。題—細い

・偶然・低い・摩天朗居。

▼八尾菜の花川柳会—四月

十四日（金）午後六時。題

—毒・曇・嘔む・牛乳。会

場—近鉄八尾駅より三〇〇

米商店街突き当たり大信寺

—八尾の天神さん。

▼隠岐不静氏（姫路同人）

はかねて糖尿病で入院され

ていたが三月八日退院—看

護婦がもう来なさると涙

ぐみ—不静。

▼本田恵二朗氏、松下梁水

氏、本田八笑人氏など本社

同人が倉敷から大萬川柳大

会へ出席。八木千代さんは

米子から出席、翌二十八日

には本社訪問、三月号発送

を手伝い、好郎、一三夫、

天笑、葉子諸氏や薫風が大

阪駅まで見送る。

▼小谷葉子さん（本社）の

伯父上、小谷秀一氏が昨年

「愛のしがらみ」を発売さ

ショッピング・ゾーン

梅田
一番地

楽しいショッピングと
くらしの
いこいをつくる
百貨店です



大阪梅田・水端定休
阪神
電話(06)345-1201(代)

本社 三月 句会

会場 以和貴荘
七日 午後六時

むかしの句会場は暖冷房なんてなかった。今のように至れり尽せりになって出席者があまりふえないのはどうしたことか――。

菊沢小松園副理事長が「日本語の多用性とその変遷」というカタイ題で登壇。天照大神からアダム・イブのころからのコトバの語源など、うまく川柳の味を盛りこんで、タップリ柳語をしていただく。

文秋氏が披露まえに、「出席者の数と句せん数が合わない」と、三句以内のルールは厳守してほしいとのべられた。

自選することによって選の勉強をする。自選のできない方は、周囲の先輩にたずねることも一方法であろう。

史好氏執筆の「本社句会の三割打者」は三句以内を対象にしたものである。選者のためにも、自句研磨のためにも三句以内を守っていただきたい。

栗氏代選の若本多久志氏選で傍島静馬氏が見事月間賞杯を手にした。老雄の健在をよるこびたい。

(F)

同人諸氏の電話番号を本社へ至急お知らせください。

席題「ダイヤル」

(河井庸佑整理)
香川 酔々選

ダイヤルの指婚しそうに 彼を呼び
ダイヤルに触れたとたんに忘れず
○つづくダイヤルへ念を押して
ダイヤルへ当り散らして かけ違い
ダイヤルの開け方金庫に張ってあり
ハミングで廻すダイヤル冷やかされ
ダイヤルの無駄と気付いた指をとめ
逢いにゆくダイヤルだから軽いこと
おぼあちゃんへダイヤル子が覚え
ダイヤルへ汗をたらして 借る話
ダイヤルの 戻りが遅いという短気
同じ時間 同じダイヤル まわす仲
合格へダイヤル廻すのもどかしい
女ですダイヤル廻すのにも品
素うどんへダイヤル何んべん回す気
ダイヤルは 甘えた声も聞かされる
マッチ通り回せば違った声が出る
かからない 筈のダイヤル ○落とす
ダイヤルを取られた父は寝てしまい
ダイヤルを 廻せと銃口 また小突き
ダイヤルを廻している間に気が変わり
ダイヤルを廻して見よか止めようか
ダイヤルの むこうへ 裸感つ かれ
ダイヤルを 廻せば 昼寝してる妻
ダイヤルへ テープの音が 愛想なし
ダイヤルを いじくり 喋る 娘は大人

警二 形水 季賛 恒明 葛城 柳宏子 柳志 柳志 文秋 一三三 太茂津 生々庵 君子 肖二 静馬 庸佑 生々庵 形水 吸江 新之助 吸江 維久子 天笑 天笑 柳宏子 祐司

ダイヤルを廻す老婆の手が重し
ダイヤルの途中で 本人顔を見せ
スタンドを点けてダイヤル掛け直し
宿直の 今日長距離を かけ廻わし
ダイヤルも芝居になればうまが合い
ダイヤルを 回せば 故郷の雪の音

席題「雑役」

高杉 鬼遊選

定退再採用 雑役用 務員 三十四
女房の手前 雑役とも 言えず
雑役で きたえた 課長の 思いやり
雑役 夫 争議の 時は 旗を 持ち
雑役のおっさん 社長と 同級生
雑役で 入社したのに 愚痴を 言う
あれで 仰山 貯めてはる 雑役 婦
雑役で いい 履歴書 を 書いて いる
再就職 雑役 という 指定 席
雑役に見られた 社長の 作業 服
終業へ もう 雑役の 顔で なし
雑役の 目に 無駄 使い も 多すぎ
雑役の いつ から 変る 夢 を 持ち
松屋町 社長と 雑役 兼ねても ち
営業は 専務 社長は 荷を 造り
雑役を してても 国家 公務員
雑役も 家では 偉い パパで 居り
社長の が 落ち 雑役の 子が 通り
雑役に 手かげん されてる へば 将棋
家 買うて 雑役ばかり 日曜 日
雑役でも その 雑役が まま ならず

摩天郎 生々庵 葛城 三十四 以兆 古方 葵水 葵水 静馬 静歩 柳宏子 悦郎 多志 久志 以兆 醉升 好一 柳志 新之助 重人 太

雑役の恋は倉庫のすみで咲き 好
 雑役の母で通した娘の門出 弥生
 雑役がボンボンと掃いている 肖二
 別宅で掃除風呂焚きする旦那 静馬
 雑役でもよければあるがと断られ 瓢太
 雑役夫妻集が雨に泣いていた 葵水
 手不足へ雑役までが不足言い 儀一
 雑役のベダルは今日も風を切り 静歩
 雑役のパートで買った花一輪 重人
 雑役の誇り東大出の息子 二三
 定退を雑役だけに見送られ 儀一
 挨拶をしたのは雑役だと気付く 綾女
 雑役の株の知識に恐れ入り 酔々
 雑役へ日々好日の風が吹き 酔々
 雑役の手入れ嬉しい花時計 酔々
 雑役夫酒と涙と浪花節 智子
 雑役へきつねうどんの湯気がくる 吸江
 雑役の親切釘を一つ打ち 柳宏子
 雑役の笑顔が恋の悩みきく 鬼遊

席題「安売り」

八木 摩天郎 選

安売りのチラシで朝の列に居る 季賛
 安売りを近所誘って買いに行き 維久子
 安売りのチラシにあったおとし穴 庸佑
 客よびの安売りの品先に売れ あいき
 安売りに団地のママを嬉ばせ 誓二
 防寒用見切ったあとこの寒さ 静馬
 同じ店まだ安売りの店じまい 肖二
 安売りに飛びついたのが子に合わず 儀一
 安売りに景品までもつく不安 醉升
 安売りを笑うてる間に社が潰れ 天笑

安売りの買わぬお客をこきおろし
 安売りの服とは娘知らず着る
 安売りへ今日は女の見栄を捨て
 安売りの噂は噂をよんでおり
 安売りへ組合からの苦情聞く
 安売りへ一家で並ぶ子沢山
 安売りはせぬとハイミス意地をはり
 トコトンまで叩きみたがサクラだけ
 安売りもしたホステスの古い庇
 安売りの売り場で妻を見失い
 今日中に売らねば腐る値ではかし
 暖冬異変冬物だけは安く買い
 さくらまで入れて安売り手を叩き
 キズ物と知って安売り愚痴を言い
 安売りにきょうも隣の列がのび

出席者

与呂志・誓二・文秋・瓢太・肖二
 ・一三夫・多久志・柳宏子・水京・
 三十四・静馬・儀一・喜風・祐司・
 醉升・柳志・維久子・葛城・形水・
 好一・新之助・生々庵・葵水・一二
 三・以兆・いさむ・重人・悦郎・太
 茂津・古方・綾女・竹莊・フジ子・
 敏・吸江・庸佑・醉々・つき子・岳
 人・凡九郎・季賛・牧人・智子・君
 子・弥生・慶之助・小松園・摩天郎
 ・鬼遊・天笑・静歩・恒明・金三・
 あいき・葉子。

静歩
 あいき
 好一
 庸佑
 以兆
 竹莊
 つき子
 多久志
 葵水
 牧人
 小松園
 智子
 竹莊
 生々庵
 摩天郎

兼題「ワキ役」

本多 柳志 選

ワキ役のリードが目立つ三枚目
 ワキ役の人氣へ主役脱いで見せ
 糸ひいて妻はワキ役つとめてる
 僕は唯漕ぐだけで妻の舵
 ひかえ目にいるワキ役が光りすぎ
 ワキ役を引立てている馬の脚
 ワキ役の苦労聞いている縄のれん
 ワキ役に支えられている七光り
 仲人として花嫁の影になり
 劇評はワキ役陣をほめそやし
 学芸会ワキ役陰で苦労する
 ハッピーエンドへワキ役は映らない
 ワキ役を無事に果たした借衣裳
 ギャラの差をワキ役舞台の数で埋め

野迷路
 藤持
 一栄
 八郎
 庸佑
 葛城
 新之助
 智子
 柴
 維久子
 牧人
 弥生
 二三



金露
 味を支える
 灘の味
 清酒
キンロ
 金露酒造株式会社

東京都 池口 呑歩

赤軍派

これやこのピエロもどきの赤軍派
赤軍派一つ覚えの黙秘権
祖国なき祖国の中の赤軍派

(現代川柳研究社主宰)

名声の歌手 脇役に母がいる
たよりにしたその脇役に裏切られ
ワキ役のズボンの膝が丸うなり
脇役が冴えて殿様らしゅう見え
シテは父子 脇役で舞い おさめ
ワキ役に叱られてもニューフェイス
ワキ役の渋さ 主役を派手に見せ
女剣劇亭主のワキで呼吸が合い
アドリブにワキ役リズム狂わされ
ワキ役の方が豪華な家に住み
ワキ役の踊り子もライト当てられる
ワキ役のせりふに妙な国訛り
ご主人は脇役で居る小間物屋
ワキ役が門の外まで送り出し
ワキ役という雲があり月清し
家元をワキ役にする晴れ舞台
ワキ役を捨てた女のしまい風呂
ワキ役に生き永らえて文化財
ワキ役の憎くさに主演生かされる
仕合せはワキ役に回る友が居り
富士山のワキ役五湖の水の色
ワキ役が座長であった楽屋裏

以兆 生々庵 醉々庵 葛城 摩太郎 一三夫 好馬 静水 葵人 重郎 悦郎 儀一 久子 維久子 三夫 形水 岳人 肖女 綾二 誓吸 江二 肖二

兼題「食い違い」

金井文秋選

ワキ一人主役三人 文楽座 柳志

損得がからんで話し食い違い
食違い 結局大工に来てもらい
捜査陣 ウロウロさせた食い違い
食違うところを税吏が先見つけ
妹の話へ姉が来た見合い
食い違う話に刑事靴が減り
食い違いばかり目につく倦怠期
努力派とマイホーム主義 食い違い
食い違う 主張へ労使疲れ果て
話し合いの余地を家裁へ来て尋ね
食い違いとけてロマンス 実を結び
食い違う 答弁野党のエサにされ
ボーナスの手取りうれしい食い違い
食い違い ドラマの筋を永びかせ
愛さめて 夫婦の歯車 食い違い
嫁が来て 食事好きが食い違い
年の差で 意見の割れた四次防
腹立てて締めたチャックが食い違い
通訳がちとあやふやで食い違い
見解の相違をマダム埋めてくれ
子と違う 意見 火鉢をひとり抱く
パパとママ 育児方針 食い違い
嫁姑 すんなり 見えて 食い違い
差向い 物に正す 食い違い
米中の 握手が正す 食い違い
食い違う 話は母が一步退き
会長の 断に任せる 食い違い

軒太楼 静馬 柳宏子 慶之助 以兆 葵人 牧水 儀一 多志 久志 一二三 竹莊 慶之助 戸無 柳宏子 柳宏子 喜風 天笑 葛城 恒明 天笑 一二三 維久子 静馬 金人 重人 秋

兼題「ルート」

大坂形水選

台所までのルートのややこしさ
モヒルト絶たれてからのボス落目
役人の終点という天下り
雑魚許り挙げてルートは雲の中
板前に今夜のルート教えられ
ルート崩して赤札顔を出し
ライバルの仕入れルートを探らせる
別のルートから持ちこまれた縁談
このルートたぐっていけと暗示され
じやの道は蛇でルートを探り当て
香港にルートを持って大姫御
金になるルートをボスは見逃かさず
ヤングからルートを断たれ老舗消ゆ
警察の知らぬルートを別に持ち
ルートみなさぐられていたから弱い

酔馬 静馬 天笑 柳宏子 天笑 花梢 花梢 水京 庸佑 小松園 小松園 一三夫 静馬 一三夫 小松園 小松園 一三夫 小松園 小松園

木曽路を訪ねて

東野大八先生のお話を聞く会
日時 六月十七日(土) 十八日(日)
目的地 木曽路・馬籠・妻籠あたり
会費 約七千円。(中津川ホテル一泊)
申し込み締切 四月三十日限り。
★申し込み所 川柳塔社事務局

ルートに乗ったらしい試験管ペビー
帳簿洩れのルート税吏に嗅ぎ出され
香港ルートのサンダラスよく似合い
ルートつんがれがどえらいねずみ穴
闇ルートがっちり握っている葉巻
静観堂 静馬 新之助 古方 柳宏子

お師匠はんルートというを握って
アリランをつぶやき北から来た男
子の育つルートに父と母がいる
金儲けのルートをつかむ名刺くれ
マージンが何処かで消えてルート
検査せんがボルノのルート分って
形水

兼題「舌」

若本 多久志 選

饒舌の腹はとくに見すかさね
ちと過ぎた機嫌の舌が回りかね
舌たらぬような女が好きになり
一枚の舌税務署でひからびる
二枚舌吐かせつものりのテープとり
赤ちゃんの舌が押しだす離乳食
毒舌家本当のこと言いすぎる
養殖のハマチと分る舌ざわり
形水

よく廻る舌におしめがまだ取れず
舌一つ男はこうも甘いもの
家じゅうを皆笑わせる舌たらず
通ぶって言う舌ざわりちと違い
友かばうある日の舌がこんなウソ
一口で舌は知ってる母の味
なめらかにこうも巧みな二枚舌
筆舌に尽くせぬ程の恩を売り
うちの犬舌とシッポがうれしそう
情勢の変化で済まず二枚舌
プロポーズ声にもならず濁舌
舌三寸ほろりとさせる節もあり
生きてゐる証拠に貝は舌を出す
なめ廻す舌で愛情示す犬
二枚目の舌が本音を喋りだし
湯どうふが舌にとけそう京の恋
弥生

みどり子の舌へ乳房は豊かなり
調子乗り過ぎて辞表を書かず舌
舌が邪魔扁桃腺の塗りぐすり
胴体は冷たし燃える蛇の舌
母の味妻の味知る僕の舌
二枚舌なし大物になれず
舌コロリコロリ世間さわがせる
嘘つきの舌ばかりに鬼疲れ
飲むほどに酔うほどによく廻る舌
離乳食舌の先から知恵が付き
酔うほどに無口の舌が廻り出す
母の舌借りた煮ににある自信
二枚舌生きねばならぬ性を見せ
舌足らずだけ誠意のある言葉
尋問を舌三寸で潜り抜け
もう一本つけさすつものりの舌鼓
毒舌の中の真情かみしめる
舌出したのをさげすんだ眼で見られ
舌ペロリ出して終った痴話げんか
舌打へ次の小言を待つかまえ
舌までは許したひとへ着る晴着
つまようじ舌に協力してもらい
舌打ちで去る押売りの捨てりふ
御免ねと言うて舌出す電話口
この頃の切手は不味いと思う舌
満ちたりた舌山菜をほめちぎり
お姑の舌に尋ねる味加減
地下足袋で飲む西成になれた舌
舌打ちで捨てた馬券に散る桜
二枚舌どたん場で又二枚舌
重人
一二三
以兆
生々庵
重人
恒明
三十四
鬼遊
水京
智子
君子
静歩
葛城
肖二
静馬
あいき
葛城
好一
新之助
岳人
儀一
摩太郎
以兆
栗

雅号ぶつちやげばなし(93)

めいろう



藤井 明朗

本名、明雄、優柔不断が欠点で世話
をやいては叱られている。戦前、新聞
で川柳を知り作句を始めた頃、明月と号して
いた。戦後二十一年「明朗」と改める。当時
重苦しい世相にせめてもの明るく朗かに生き
んと、おこがましくも「明朗」とした。名は
体を表わすという事があるが、これは恥しい
次第で、程遠い私ではあるが、初心にかえっ
て、つとめて朗かに、一歩一歩川柳の発展に
微力をつくしている現状である。往きつ戻り
つこの道ではあるが、鈍才にむちうって川
柳の道を歩む私である。

明るく朗かに川柳の街づくり

明朗

誓二
水京
静馬
多久志



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

川柳ささやま句会

河原みのる報

アルバムの長靴 凜凜しい 中尉殿 素水
枕 経 一切 空々 諸悪業 近江
亡父 恩 ぶだけの長靴 十一半 雅佐女
長靴の彼 貯めてるといふ 噂 青峰
長靴でドカドカドカと 昼の酒 英断
新築へ長靴 裏へまわります 清香
ブーツ洗う 少年に 北風が冷たすぎ 昌宏
カッとして 断絶までを 考えず 竹堂
断絶の 屋敷松の木 だけ 残り 村雨
断絶へ 母 仏前に 丸く 居る 可住
断絶へ ああ 養老院 養老院 無鬼
シヨック 死の 最期に 人の 孤独 知る 一声
只一夜 処女が 魔性になる シヨック 無聖
本当の シヨックは何んにも 話さない みのる
坊やも シヨックや ちと コマーシャル 蕪石
うそ ついた あと 迷う 目の やり所 とおる
頬を 打たれた 後の 言葉で 痛さ 知る 孟
金がないから 働きたい のある 夫婦 弥太郎
我ままな 願ひへ 神の 苦笑い 富士子
八尾菜の花 川柳会 飯田悦郎報

いつのまに 二人の 上に ない お月様
二次会を 逃げて 帰って 恩を 被せ
清純な 二人へ 大人 追い かける
二で 割れぬ 理屈を 女抱いて 老け
懐妊 ふところに 寒附 まだ 釣れず
寒い とも言えず 招待 席に いる
寒さ もう 春の 息 吹き 感じられ
チャルメラが 一そう 夜を 寒くする
寒い 日は 寒がりの 父 思ひ 出す
貼り替えた 障子の 白さに 寒く いる
傷口を なめて 風の子 走り 出す
傷口の 訳を 若さが ぐどう 聞き
地下足袋の 女の 素顔に はげまされ
色足袋と 替えて 茶漬けの 顔になり
いい 仲を 鳥居の 鳩に 見てもらい
由緒ある 鳥居 かけてると ことが 良い
鳥居 ある お寺 拍手 打つ 迷い
大鳥居 だけ 焼け 残る お宮さん
靖国の 鳥居 明治を うなずかせ
風船の あれあれ 鳥居 越えて ゆき
満腹の 順に 蜜柑を むきは じめ
炬燵から みかんの 追加 言いつける 牧人
むらくも 川柳会 藤井明朗報

飛鳥 静馬 弥生 岳人 誓二 葵水 小松園 鬼遊 綾女 悦郎 醉々 弥栄子 宏子 美代 摩太郎 凡九郎 喜風 肖二 儀一 天笑 牧羊人 葉一 福子 卓也 綾美 とき子 ひとり 文子

D51 が 赤字 路線を 立て 直す
暖冬 ヘルイズム 狂わす 生野菜
名作 が 国宝 となり 拝まされ
山焼きの 詩情 ゆたかな 古都の 春
名作 へうなずく ばかり 見て 廻り
川柳大阪 児島与呂志選
楽しみは 国の 平和が あればこそ
合格を 祈った お札と 便り 着く
楽しみは そつと しまった 律義な 子
楽しみの 茶の湯で 心まるく なり
ひらがなの 便り 楽しい 母の 味
初戒心の ゆとりへ 福が 来る
甘い味 グラスに 根胆 秘めている
楽しみは 晩酌 一パイ子の 笑顔
楽しみへ 茨の 道も 苦に ならず
どこまで 楽しみなのか プロになり
よれよれの 札喜 怒哀 楽の 過去を 持ち
楽しみの 一つや 二つと 云い 逃れ
陽向は こ二十日 ねずみの ふむ 車
一札を入れて 和解へ ひさを 折り
紅ついた グラス程 よく 寄りかかり
初恋の グラス 小さく ふるえて る
穴うめて 見たが ねずみの 知恵に 負け
子沢山 あと 楽しむと ひやかされ
孫の手 が やっと 届いた 下足 札
デパートで 買った 時ほど 輝かず
風呂で 聞いた 話と ちがう 差額の 差
市場 籠み かんが 先に 転げ 落ち
南大阪 川柳会 金井文秋報

孝華 英子 澄水 明朗 勇 野菜 生 野 菜 英子 澄水 明朗 勇 野菜 生 野 菜 英子 澄水 明朗 勇

試歩の目に春待つ花の息づかい
 きこえぬが太鼓のひびき膝にあり
 上客へ女将は足袋を履き代える
 たまに買うだけで上客ぶっている
 寒行の太鼓踏切り未だ開かず
 一ぱい飲んだ太鼓交代し
 政治家の妥協は何か紐がつき
 じゅうたんのすれ音だけがする歩み
 ライバルとして同じ道歩む
 許されぬ妥協を許す裏に金
 一枚の舌で結構うそも云い
 叱られてゐるのは太鼓忘れさせ
 黄と赤の信号ばかりの世を歩む
 妥協して帰る夜道の足にぶる
 すっぱりとフンキ包む太鼓鳴る
 再起する夫と点字の道歩む
 毎日が妥協今日まで添ひ遂げる
 内心は実家で待っている妥協
 妥協する夫に勝気あきたらず
 結局は貸した弱身の妥協点
 退院の母の歩巾へみな合わせ
 再会へどちらともなく歩み寄り
 一枚の色紙に偲んでゐる恩師
 上客としてオリピックを待つ宿舎
 一歩二歩三歩男の意地が振り向かず
 ブツツとばやいて歩く私鉄スト
 あなどれぬ太鼓と国取り諦める
 出発の時間来たのに来ぬ幹事
 太鼓叩かれピエロは踊らねばならず
 寄り添うて歩み来し道ふりかえり
 学校と社会の歩み違いすぎ

上客と見たか植木屋離さない
創業以来おやじおやじとやってくる
松葉杖はずし義足へ試歩一歩
まるべに川柳会（大阪市） 川村好郎報

濡れてゆく春雨にしては冷たすぎ
梅どころか入試祈願の天満宮
憎しみを焼いて残り火だけの恋
童べ歌夕焼け雲を追って行き
加害者の誠意へ憎しみも忘れ
幹事ではないのにじっとしておれず
ほどほどと傘に重たき冬の雨
浮雲のごとくに過ぎ日惜しまれて
憎しき下から出ればつけ上り
世話好きで片付けられてる善意

どんぐり川柳会（大阪市） 川村好郎報

朝の日はいっぱい昨日振り向かず
喧嘩したあととは見えぬ水入らず
お茶の間も廻る舞台に似て使い
手袋を脱いでこけしの肌を撫で
六帖一間せて朝日の入る幸
水入らずだがサラリがもの足らず
割勘に代える茶の間のテレビ消す
寂塾でもめて手袋落して来
雑草も朝日へ大きく咲きほこり
差別なくにつこり朝日いま昇る
妥協した心に朝の陽が燃える
出稼ぎの飯場へ朝日差しこんだ
猛勉の下の茶の間の笑い声
孝行の真似ごと茶の間増築し
賃流れ手袋入れたまま売らし

静馬
八郎
章
立
飄
太
慶
星
斗
一
茂
節
子
幸
子
扇
里
好
郎
子
岳
人
喜
風
醉
天
儀
鬼
遊
弥
生
松
園
悦
郎
修
史
い
わ
を
を
史
好
砂
真
一
二
三

さあ起きよさあ顔洗えと朝日差す
朝日まぶし古傷ちくと疼きだし
幸せは茶の間に親子水入らず
おかまいもしない茶の間が温かし
あすなろ川柳会（大阪市） 川村好郎報
目くばせへって行つた貸してんか
妻の眼くばせに盃伏せました
ポケットのふくらみ程持ていず
鵜飼いの鵜でよしポケット温かし
取り柄など何にもないという自信
景品のよくに伸びてる無精髭
受話器をふたして目くばせ確認し
客を釣るはずの景品残りすぎ
どんぐり川柳会（羽曳野市）川村好郎報
妹の地味へ縁談又おこり
催促は出来ぬが忘れておらぬ金
過去のことケロリ忘れるありがたさ
地味だけど貴方が見たててくれた柄
忘れてはいないと恩に着せられる
酔々

入会の好機
四月新学期
(規則書進呈)

會員募集

大坂市南区大宝寺仲之町一丁目
(〒五四二) 誓得寺内

関西奇術教室

派手好きな娘嫁いで地味な母
商売は地味だというのが儲け派手
松過ぎてても不幸なことは忘れよう
先代の地味が押えている老舗
好郎

烏ヶ辻川柳会

森下 愛論報

見舞客面会謝絶見て帰る
鍋料理客が帰って喰べなおし
お悔みの客は頭を下げただけ
石段でつまづくミニにニヤリとし
笑い声 つつむ茶の間は孫がいる
赤電話かけたとたんに待たせたね
遠来の客へお点前運ばせる
愛論

堺・若芽合同川柳句会(堺市) 吉岡青香報

病む夫へふきぶりのなんの百度石
ふきぶりに招かぬ客が来て座り
ふきぶりに柳の影で待つ女
儀一
ふきぶりに花嫁入り込む目出度い日
評判は金で買えぬと家訓なり
評判のよかった先生がニセと知り
評判を画廊の隅で聞くベレ
文秋
評判を待つ居れずでさぐり入れ
つきあいは浅いが寺での顔馴染み
徳子
浅い知恵結局しっぽ巻いて去り
誓二
浅慮の溝がだんだんと深くなり
鶴丸
広く浅くマジャンでもゴルフでも
純粋とはめられもする浅い知恵
松栄
オロナイン折込んでおく浅い傷
祥月
はったりが底の浅さを見透かされ
青香
デートにも心の奥に扉立て
藤持
自動ドアに交もイメジ消さぬ店
夢成
ドア閉めてきのうの虹をもう向かず

友好の扉はやはり礼智信
宏子
思慕を断つ決意の扉叩く音
好郎
かけ落ちの荷物を運ぶ乳母車
志寿
思いどおり仕事運んだ酒の味
静馬
サラリーを運ぶ主人にしたいくない
笑痴
嫁の荷へベッドは何処へ置くつもり
茂美
子が出来てからのつばめの運びよう
小松園
南海川柳会(大阪府) 辻 圭水報
上得意だけと前売品かわされる
清涼
前売りへ組織の強さ知らされる
圭水
前売りに好きなスターのかぶりつき
誓二
強引に前売券を送って来
柳信
前売りの人気を煽るローカル紙
摩天郎
前売が取れたと留守居へ赤電話
金三
前売券ペアでかって恋すすむ
宏子
顔を見て前売券を断われず
和郎
川柳わかやま 垂井葵水報
信じてはいるけど判は貰いたい
守夫
信じてはこのひと言に弱い人
千寿子
信じてはいけない手相が気にかかり
とろ子
賑かな手締めで開通を祝い
四四坊
手を打ってひらくお遊戯第一課
竜
濁流を呑んでも池は語らない
弘
墓洗う水はお寺の池で借り
峻
石投げてばかり気まずいデートの池
春亭
ビニールのお池目高が泳いでる
みさお
古池に今宵も月が浮いてる
千枝子
友誼えは池に座った缶ビール
おせい
水蓮の池に座った缶ビール
一風
手打ちそばすすする夜更けの旅の駅
ふみよ

手打ちそばニッポンの味ここに生き
智
図書館の若さの中で好きな本
美智世
国体に若さ溢れる秋日和
良四郎
外交も若いだけではまらまら
まさお
スキー列車若い体臭むせ返える
喜一
若い頃語る祖父の目嬉しそう
里美
失言も若い二字で許される
俊
王朝のデートもあった奈良の池
久司
信じてはいるが気になる妻の夢
増蔵
純情さ裏切られてもまだ信じ
照代
メキキップ今日の若さを念入りに
延伊知
国体へ若い力をぶっつける
弘生
いま池に居たのが皿ののってくる
葵水
家建てる夢池もありカモもあり
不也
信じてますがなと女将の舌長し
不也
威勢よくお手拝借の声もよし
和歌山七面句会 中筋三幸報
牛乳ビン丸から角になるセンス
淳子
つつましい二階の音は女客
光治
サボテンの二階の窓に射す西陽
勇次
ポロ二階借景だけで借りてよし
源一
困りますわと云って目くばせる女
杏林子
二階たす話に長男長女次女
和美
うちの困りものよとのろけられ
政夫
困つるようには見せぬ美しさ
春子
困った困ったとい言ひ妙手打ち
昭仲
牛乳を大人ばかりが飲んでる
紅梅
二階から呼び戻された焼芋屋
城石
牛乳のまだ温みあり掌に受ける
三幸
困つたら何時でも来いという刑事
渠

城北明朗句会

川口弘生報

署名簿に主張も知らぬ名が混る 太茂津
 名簿には肩書順に名をつらね 隼人
 整理した名簿へ老の心足る 肖二
 名簿たもにやと尋ねりや犬が吠え シゲ
 改名に波乱を偲ばせている名簿 弘生
 名簿を見友の笑顔が目に見え 賛平
 名簿には無い人の顔ばかり見え 進
 初恋の人の名もある古名簿 満津子
 悪筆が署名簿前にちとひるみ 綾女
 サンマ焼く隣りにまけず煙出す 秀村
 病気でベッドに寝たいという若さ 繁子
 中風で寝てると名簿書いてなし 春果
 半紙にも人の心と裏表 ますゑ
 半日は好きな植木へ腰をすえ 三十四
 席順がどうのと上席空いたまま 小路

川柳東大阪

竹中肖二報

落陽を背にピラット昏れ残る 柳宏子
 埴輪哀しや土竜に眼盗まれる 鬼遊
 雪山へ墓標静かに語りかけ 湖風
 西陣の機音つづく裏通り 竹充
 待たされた部屋ストープが熱すぎる 久子
 ストープと対話の宿直終えて出る 新之助
 孫がいるさてストープの置きどころ 一栄
 価値などは知らず埴輪の顔を愛で あいき
 要点へアンダーラインを太くひく 肖二
 ストープの燃えるに女冷たすぎ 喜風
 万華鏡のぞく子の眼のかがやけり 綾女
 チンドン屋張り合いが出る裏通り 豊三
 食通に案内される裏通り ひろお

川柳しんぐう

大矢十郎報

ベトナムの難民あわれ笠一ツ 和子
 裏通り抜ければ女しんとする 桂太楼
 怨敵の恨みも消えた埴輪の瞳 誓二
 一本の線でデザイン生きて来る 文秋
 裏通りみんな素顔で生きている 酔々
 俺の鼻あんな形か児の漫画 儀一
 雪山へいどむ軽装たしなめる 佳鳴
 百貨店くじの係りはアルバイト 喜楽
 裏通り都会の恥部をさらけ出し 思月
 この線でならと団交控室 三十四
 埴輪出た我が山出入り禁じられ 悦郎
 インターチェンジ空を見れば曲線美 徳里
 権利金こんな高い裏通り 静歩
 遠い祖先偲ぶ埴輪の目鼻だち かんじ

十七才タバコの煙に立ち止まり 裕子
 タバコ好き勝手な理屈つてのみ づる枝
 タバコのみ一寸一服と又すわり 君代
 商談へタバコ一服間をもたせ 孝典
 灰皿の休む暇ない愛煙家 直吉
 セールスは吸えぬタバコも手長く 清定
 口無沙汰やはり紫煙の輪が恋し 純子
 禁煙を破って一服うまいこと 富子
 床で吸うタバコで今日を締めくくり 暢
 週刊誌ライバルにして煽りたて 豊子
 週刊誌事典娯楽に使い分け 暢
 人目さけひろい読みする週刊誌 豊子
 週刊誌見終える通勤駅に住み 義孝
 週刊誌ドラマに変える週刊誌 千寿子
 真実をドラマに変える週刊誌 純滋
 名人は遠きにありて近くあり 光代

川柳たけはら

森井藩居報

魚釣りの名人今日はフグを釣る 千宜
 偏屈を通し名人らしく見せ 久司
 週刊誌の知識で親に立ち向い 十郎

スマートに生まれて薬はなせない 扇水
 政見は二の次握手して回り 五湖
 郷に入りこにはここの人間味 南風
 神様に諦めるなと励まされ 西合
 書き終えてお茶が美味しい原稿紙 英子
 先祖だと言われる墓へ水をかけ 日出夫
 愛還る日を待つ過疎の嫁さおくれ 郷愁
 老いの知恵正論吐かぬことに決め 大陸
 尾に鰭がついた噂に悩まされ 泉
 勘定を忘れてからが通となり 春子
 娘の便り届いて雨の日も楽し こふみ
 野良犬の知恵女子寮へ寄ってくる のり子
 ビッコにもなれてビッコを振りまわり 鬼焼
 非番日の釣りひま人と誤解され 木瓜
 鼻唄にただなんとなきホツとする 千百合
 痼癪をおこせば釘がひん曲り 不動
 バイクぶつ飛ばしてたいたいま十六才 文明
 妻の留守足にマニキュアつけてみる 英詩
 地球より重い命を軽視され 清
 ご外遊お夫婦切りにしてあげな のばら
 積木にも似て定年でくずれかけ 雅鳳
 そばに在るだけで楽しい人と旅 貞子
 孝行の一つに愚痴を聞いてあげ 峰泉
 おじさんと言われてハツと立ち止ま 政己
 寺へ来るとき善人の顔である 己

(次号へつづく)

本社四月句会

日時 四月七日(金) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275 番

兼題 柳 話
「発明」
「幹部」
「誕生日」
「ヒロイン」

川村好郎
菊田いさむ
傍島静馬
水谷庄選
戸田古方選

席題 三題 当日発表
会費 二百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社

5月の兼題 「変身」 「ストレス」
「沖縄」 「音痴」

募集

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園選
課題吟(各題5句以内)

「長生き」 木山 要次選
「小走り」 久米 奈良子選
「仮面」 浜畑 胡蝶選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園選
課題吟(各題5句以内)

「小口」 恒松 町紅選
「看板」 松本 忠三選
「疑う」 小幡 里風選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

恐竜博

2億年前の世界

3月18日→6月4日

主催 朝日新聞社

太古の生物・恐竜が
春の宝塚にのみがえ
りました！
スベクタクルな世界
恐竜博どうぞ！



宝塚ファミリーランド

阪急宝塚駅下車 入園料…200円・100円

定価 百八十円(送料十六円)

半年分 千七百七十円(送料共)
一年分 二千二百円(送料共)

昭和四十七年三月二十五日印刷
昭和四十七年四月一日発行

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

編集兼 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

ペンペン草・

★陽春四月号といつても、別に四月号らしい特集をしない。が、ページのそこそこ花が咲いていると思つて、読んでいただければ、あなたの匂がフクイクたる香りを放っている。

★スリと空果が、わが世の春と動きだす。亡父の少年時代、家の二階から仕立屋銀次の二階が丸見えで、雨の日など部屋の中でスリのレッスンに余念がなかったそう。ひとりがフスマのかげから出てくると、フスマのこちら側で待っていたヤツが、ボンと当って相手の懐中から財布をスリとる。ヘマをやること、東ふらに云うとドジをふむと。一軍選手からこっぴどく叱られる。

★ボクのドン底時代、スリに三か月ほど食わせてもらった。(捕まっていたからスリとわかつたのだが)長谷川伸先生の出世作「名人中切り」の主人公が、やはりスリからタバコ銭

を買っていた。

★警官上がりに二階を貸して半年分の部屋代を踏み倒されたが、その後に貸したスリに助けてもらったのだから皮肉な話である。

★映画館で売店を経営していたころ、近鉄線小阪駅から鶴橋経由で桃谷駅へ帰るのだが、布座敷から乗ってきた二人連れの男が、ボクの前に横に立った。

★コイツはクサイぞ、と直感して売り上げのフクロを足元までたらし、どうだ、ヤレるものならやつてみい、と、スリらしい前と横の男をにらんだ。いく

ら名手でも足元の獲物はとりにくいはずだ。小屋がバレてから帰るのだから酔客が多い、カモはいくらでも車内にいたはずだが、どうやらこの二人組、意地

にでもボクからせしめようとしていることが、その様子でわかった。

★こっちも負けてたまるか、とユメ袖断ぜず金神経を前と横にどがらせていたが、鶴橋駅をおりる時、横のヤツ

葉子コーナリ

▲「不二田師」と書いてあるまいし……」と書き直します。

▲不二田様は肉類や麵類がお好き、私は嫌い。胃がりの寒むがり、どうもうまくいきませんが、方向音痴だけは一致。昨日行った所が今日は迷路。地上地下を問わずいつもウロウロさせられます。

が後方へまわった。金のはいつているフクロは足元だから安心だがズボンのうしろポケットに定期乗車券がある。

★結局はモノの見事に定期券をイカれてしまった。いつやられたのか、よく考えてみたが、どうやら降車の際、足元に注意をそらした瞬間、敵に盗歌があがったらしい。

★春ともなればスリに用心してください。三月号送本の日、連合赤軍のあさま山荘落城のテレビを見たが、人質戦術にでた彼らはスリより劣る卑怯者ぞういとおもった。

(不二田一三夫)



豚饅・焼売・焼餃子



大阪・なんば

TEL (641) 0551-2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストア

